

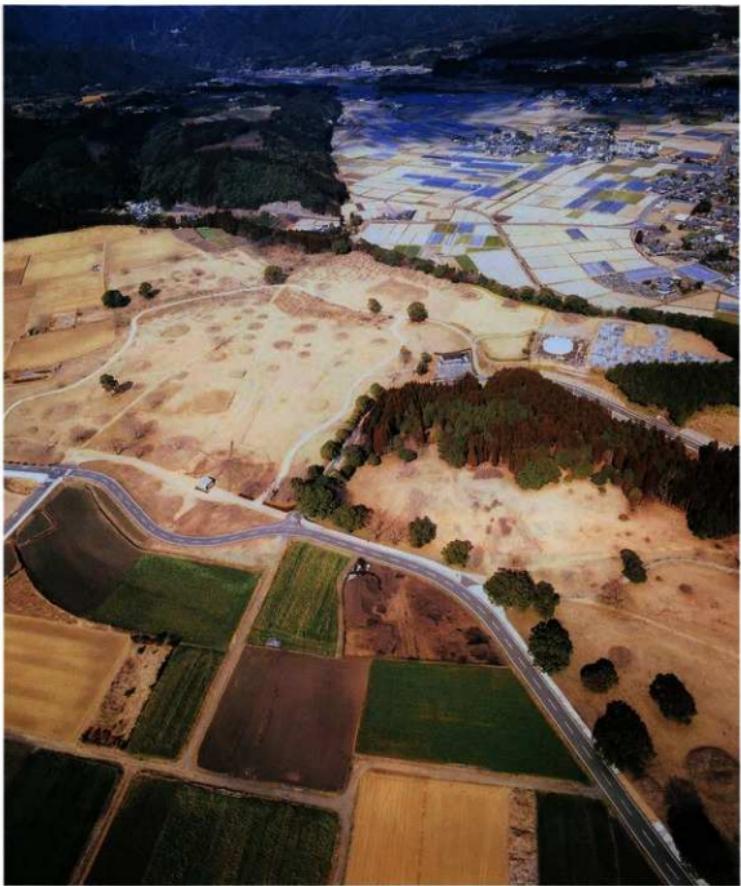
西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第45集

# 西都原遺跡

西都原周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

宮崎県西都市教育委員会



1. 調査区 遠景（南から）



2. SA1. 床面検出状況（西から）



3. SA1. 中央掘方と剥片出土状況



4. 調査区基本層序



5. SA1. 土層断面



6. SA2. 土層断面



7. SA3. 土層断面



8. SA4. 土層断面

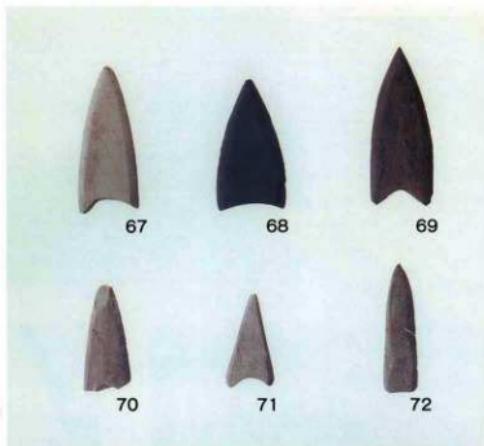


9. SA5. 土層断面



10. SA6. 検出状況

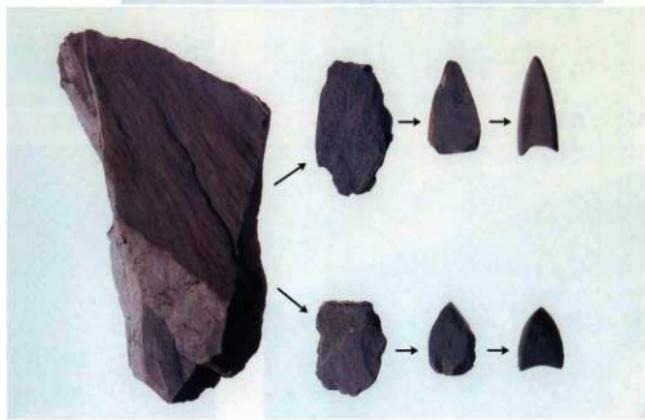
11. SA3 出土磨製石鏃 完製品



12. SA3 出土磨製石鏃 未製品



13. 磨製石鏃  
製作工程  
(推定)



I 工程

II 工程

III-1 工程

III-2 工程

## 序

古来、日向国の中心であった西都市には多くの文化財が分布しております。これらの貴重な文化財を後世に伝えるのは我々の責務であり、本市では文化財の保護、活用に努めてきていますが、各種の整備事業や開発事業によって影響を受ける埋蔵文化財・遺跡については、記録保存のための発掘調査を行っています。

西都市教育委員会では、平成12年度から始まった西都原周辺整備事業に伴い、西都市大字東立野所在に所在する西都原遺跡の発掘調査を行いました。本書は、その遺跡調査報告書です。

今回の調査では、縄文晩期の竪穴住居跡1軒、古墳時代に先行する弥生時代後期前半の竪穴住居跡が5軒検出されました。それに伴い、多くの弥生土器破片と石器が出土しました。その内容を分析すると、住居内において石器を製作していた痕跡を確認することができました。本遺跡の調査は西都原台地が古墳群だけでなく、弥生時代においては集落として利用されていたことを示す資料となりました。

今回の調査により得られた成果は、西都市の先史時代を理解するためには極めて重要なものです。

本報告が学術的な研究のみでなく、社会教育や学校教育の面にも広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と認識を深めるための一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・整理作業にたずさわっていただいた方々、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成18年3月30日

西都市教育委員会

教育長 三ヶ尻 茂樹

## 例　言

1. 本書は、西都市教育委員会が平成 15 年度実施した西都原遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成 15 年 12 月 7 日から平成 16 年 2 月 16 日まで実施した。
3. 発掘調査は、西都市教育委員会が主体となり実施した。
4. 調査は、津曲大祐が担当した。
5. 調査及び図面作成は、津曲が行い発掘調査作業員全員で補助した。
6. 遺物の実測・遺構・遺物の浄書は津曲が行った。
7. 本書の執筆・編集は津曲が行った。
8. 本書に使用した方位は、座標北（G. N.）と磁北（M. N.）である。
9. 本書に使用した標高は、海拔絶対高である。
10. 報告書に用いた色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修の「新版標準上色帳」に準拠した。
11. 本書に使用した写真は津曲が撮影した。一部写真の撮影に際し、宮崎県埋蔵文化財センターの写場を使用させて頂いた。空中写真は（有）スカイサーベイ九州に撮影を委託した。
12. 本書に使用した遺構記号は SA（堅穴住居跡）・SB（掘立柱建物）・SC（土坑）・SD（土壙墓）である。
13. 出土遺物の詳細な観察所見は遺物観察表に示した。
14. 出土した弥生土器について宮崎県埋蔵文化財センター谷口武範氏、石鎚に関して同センター藤木稔氏にご教示頂いた。
15. Fig.1 の地形図は、平成 14 年 10 月 1 日発行の国土地理院 1：25,000 「妻」を使用した。

## 目 次

第Ⅰ章 序説 .....	1	第Ⅲ章 西都原遺跡の調査 .....	8
第1節. 調査に至る経緯		第1節. 平成15年度の調査	
第2節. 調査の体制		第2節. 基本層序	
第3節. 遺構と遺物		第4節. 総括	40
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	2	報告書抄録	

## 挿図目次

Fig.1. 西都原遺跡調査地点と周辺遺跡分布図 (1/25000)	Fig.20. SA3 山土遺物実測図4 (1/2・1/3)
Fig.2. 調査区の西都原台地における位置 (1/5000)	Fig.21. SA4 実測図 (1/60)
Fig.3. 調査区全体図 (1/400)	Fig.22. SA4 出土遺物実測図 (1/3)
Fig.4. 基本層序図 (1/20)	Fig.23. SA5 実測図 (1/40)
Fig.5. SA1 尖測図・床面遺物山土状況 (1/60)	Fig.24. SA5 山土遺物実測図 (1/3)
Fig.6. 住居掘方と貼り床の関係 (1/60)	Fig.25. SA6 実測図 (1/60)
Fig.7. SA1 焼上内遺物出土状況 (1/60)	Fig.26. SA6 出土遺物実測図 (1/2・1/3)
Fig.8. SA1 山土遺物実測図 (1/3)	Fig.27. SB 尖測図 (1/40)
Fig.9. SA1 出土遺物尖測図 (1/2・1/3)	Fig.28. SC1・SC3 実測図 (1/40)
Fig.10. SA2 実測図 (1/60)	Fig.29. SC1 山土遺物実測図 (1/3)
Fig.11. SA2 出土遺物実測図 1 (1/3)	Fig.30. SC2 実測図 (1/20)
Fig.12. SA2 出土遺物実測図 2 (1/3)	Fig.31. SC2 出土遺物実測図 (1/3)
Fig.13. SA3 実測図 (1/60)	Fig.32. SC2 出土遺物尖測図 (1/3)
Fig.14. 住居掘方と貼り床の関係 (1/60)	Fig.33. SC2 山土遺物実測図 (1/3)
Fig.15. 床底上遺出土状況 (1/20)	Fig.34. SO 実測図 (1/29)
Fig.16. SA3 烧土中遺物出土状況 (1/60)	Fig.35. SD 出土遺物実測図 1 (1/3)
Fig.17. SA3 出土遺物実測図 1 (1/3)	Fig.36. SD 出土遺物実測図 2 (1/3)
Fig.18. SA3 山土遺物実測図 2 (1/3)	Fig.37. 磨製石器製作工程模式図 (1/3)
Fig.19. SA3 山土遺物実測図 3 (1/3・1/4)	Fig.38. 聚穴住居構造模式図

## 図版目次

卷頭 1 1. 調査区概景 (南から)	8. SA4 土層断面
卷頭 2 2. SA1 床面検出状況 3. SA1 中央部掘方と緑色頁岩	9. SA5 土層断面
チップ出土状況	10. SA6 検出状況
卷頭 3 4. 調査区基本層序 5. SA1 土層断面	卷頭 4 11. SA3 出土磨製石器完製品
6. SA2 土層断面 7. SA3 土層断面	12. SA3 出土磨製石器未製品
	13. 磨製石器製作工程 (推定)

P L 1	1. 調査区遠景（北から） 2. 調査区全貌（真上から）	37. SC2 遺物出土状況 2面
P L 2	3. SA1・SA2 床面検出状況 4. SA1・SA2 検出状況	
	5. SA1 土層断面（A-A'） 1 6. 同 2	P L 8 38. SB 検出状況 39. SD 半裁状況
	7. SA1 遺物出土状況	40. SD 遺物出土状況 41. SD 完捌状況
P L 3	8. SA1 中央部掘方 9. SA1 掘方と貼り床の関係	42. 調査区西側 43. 亨貯藏穴
	10. SA1 主柱埋土 11. SA2 遺物出土状況	
P L 4	12. SA2 土層断面（A-A'） 1 13. 同 2	P L 9 44. SA1 出土遺物 45. SA2 出土遺物
	14. SA3 床面検出状況 15. SA3 床面検出状況	P L 10 46. SA3 出土遺物
	16. SA3 土層断面図（A-A'） 1 17. 同 2	
P L 5	18. SA3 土層断面（B-B'） 1 19. 同 2	P L 11 47. SA4 山土遺物 48. SA5 出土遺物
	20. SA3 遺物出土状況 21. SA3 床面土甕出土状況	49. SA6 出土遺物 50. SC1 出土遺物 1
	22. SA3 剥方と貼り床の関係 23. SA3 主柱土層断面	P L 12 52. SC2 出土遺物 2 53. SD 出土遺物
P L 6	24. SA4 床面検出状況 25. SA4 検出状況	P L 13 54. SA1 出土磨製石鏡未製品
	26. SA4 土層断面（A-A'） 1 27. 同 2	55. SA1 出土綠色頁岩剝片
	28. SA4 土層断面（B-B'） 29. 同 2	P L 14 56. SA3 出土頁岩剝片 57. SA3 出土綠色頁岩剝片
	30. SA4 遺物出土状況	58. SA5・SA6 出土磨製石鏡・剝片
P L 7	31. SA5 遺物出土状況 32. SA5 土層断面	59. 梗出面出土磨製石鏡未製品
	33. SA6 検出状況 34. SA6 土層断面	60. 綠色頁岩石核
	35. SA6 床面検出状況 36. SC2 遺物出土状況 1面	

## 表目次

Tab.1 平成 15 年度西都原遺跡出土土器観察表 1

Tab.4 平成 15 年度西都原遺跡出土石器観察表 2

Tab.2 平成 15 年度西都原遺跡出土土器観察表 2

Tab.3 平成 15 年度西都原遺跡出土石器観察表 1

# 第Ⅰ章 序説

## 第1節 調査に至る経緯

西都原遺跡の発掘調査は、西都原古墳群及びその周辺地域整備構想に伴う工事で実施したものであり、平成12年度からの継続事業である。

事業内容は、国指定特別史跡西都原古墳群内に駐車場やガイダンス施設を建設する工事で、工事区域の周辺地は埋蔵文化財調査例が多くあるため、事業主である西都市活性化推進室と協議した結果、工事対象地域に遺構が存在した場合、それを保存することが困難と判断し、事前に確認調査・発掘調査を実施することとした。平成12～14年度までは、確認調査のみで終了していたが、平成15年度調査区は平成12年度確認調査時に豊穴住居跡が検出され、工事に伴い地下遺構に影響があると判断し、記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

## 第2節 調査の体制

事業主体 西都市活性化推進室

調査主体	(調査年度)	(報告書作成年度)	
教育長	黒木康郎	三ヶ尻	茂樹
文化課長	森康雄	伊達	博敏
同補佐	村岡満徳	村岡	満徳
同係長	蓑方政幾	蓑方	政幾
同主事	鹿嶋修一	主査	重永浩樹
同主事	笠瀬明宏	笠瀬	明宏

調査担当 同主事 津曲大祐

調査指導 日高正晴(西都原古墳研究所長)

発掘作業 緒方タケ子、廻田勉、廻田和子、黒木トシ子、疋田はる子

整理作業 奥野和子、狩野由美、奈須真紀子、中原昭美、長谷川明美

現場来訪者 今塩屋毅行(宮崎県埋蔵文化財センター)、東憲章(宮崎県立西都原考古博物館)、樋渡将太郎(新富町教育委員会)、以上の方々に貴重なご助言ご指導を賜った。  
(敬省略)

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

### 第1節 立地

西都原遺跡は、宮崎県西都市の東南部に位置する。現在の西都市街地からは直線距離にして約2kmである。

九州山地から東に伸びる丘陵が一つ瀬川により浸食され流域に沿い沖積平野(現在の西都市街地)を形成し、その平野を挟んで洪積台地が伸びる。一つ瀬川をはさんで東側(左岸)が祇園原台地で西側が国指定特別史跡西都原古墳群の広がる西都原台地である。

このように当地域の地形は九州山地から伸びる丘陵が河川の浸食により形成された沖積平野と「原」と称される台地から成り、その台地上や台地中段域などの縁辺に遺跡が集中するといった特徴がある。

### 第2節 歴史的環境

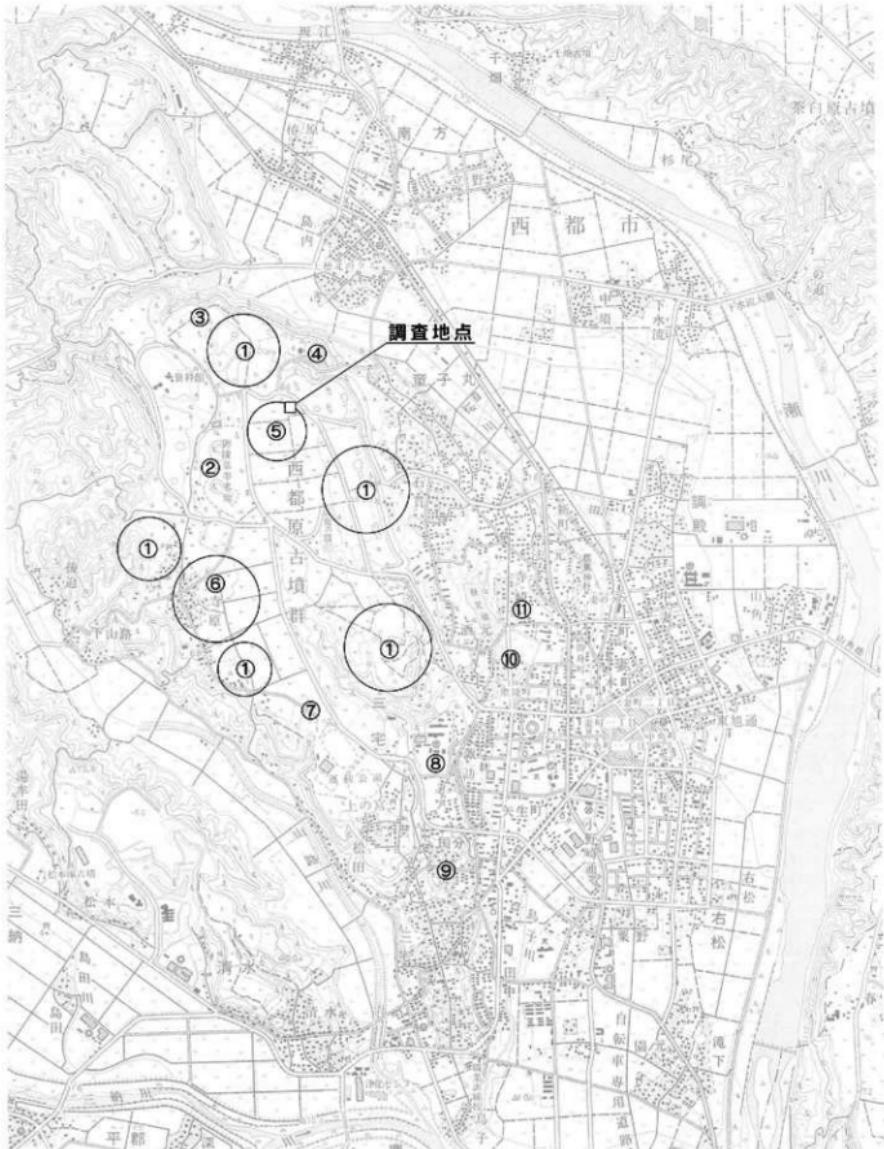
南部九州の代表的な古墳群である西都原古墳群が所在する西都原台地には、縄文時代から近世にかけて多くの遺跡が所在する。

本報告に関わる主要な生活遺跡を概観すると、まず台地上の北西端に位置する丸山遺跡がある。平成元年度実施された調査で縄文時代早期の集石遺構が確認され、それに伴い、貝殻条痕文を施す縄文土器片が出土した。縄文時代早期の当地における人々の生活痕跡を示す(註1)。昭和32年の調査では、同じく台地上の南に位置し、丸山遺跡から直線距離にして約1.5kmの位置にある原口遺跡でも、集石遺構や縄文時代早期の貝殻条痕文土器片(前平式土器)と石器(剥片、石匙等)が出土している(註2)。

弥生時代の遺跡としては、日向考古調査団により昭和23年に寺原遺跡の発掘調査が行われている。寺原遺跡は西都原台地上の西側に位置する寺原集落の北側緩斜面上にある。トレンチ調査であるため全体像は不明であるが、柱穴や溝状遺構が検出され、出土遺物には弥生土器、磨製石鎌がある。また、表探資料として石斧・石鎌・石匙・石槍・土製劔鉗車などが報告されており、時期は弥生時代終末期に比定されている(註3)。昭和58・59年には寺原集落のほぼ中央に位置する地点で寺原第1遺跡が調査された。家屋建築の事前調査として西都市教育委員会が2次にわたり調査を行い、内部突出による間仕切型住居を2軒検出した。2号住居跡は間仕切りの他、矩形の張り出し部が確認された。出土遺物は多くが弥生土器片で住居跡内から磨石が確認された。弥生時代終末期に比定されている(註4)。

平成3年度に公営墓地造成工事に伴い調査された新立遺跡は、立地も西都原台地北東側に張り出す尾根上先端部にあり、古墳群から離れており、竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡1棟等からなる弥生終末期から古墳時代前期の集落と考えられる。土器・石器・鉄器等を出土し、当地域の弥生から古墳時代の転換期を知る上で重要な遺跡で、時期の幅もあることから比較資料が充実することにより再検討すべき遺跡である。その下層からは縄文時代早期の集石遺構29基が検出されている(註5)。

平成5年～7年にかけては西都原台地上で圃場整備に伴う発掘調査が行われ、酒元ノ上横穴墓群などが調査された(註6)。その中で台地中央部においては竪穴住居跡、土坑、溝状遺構等が広



1. 西都原古墳群 2. 墓参考地(男塚・女塚) 3. 丸山遺跡 4. 新立遺跡 5. 西都原遺跡 6. 寺原遺跡  
7. 原口第2遺跡 8. 日向国分尼寺跡 9. 日向国分寺跡 10. 酒元遺跡 11. 寺崎遺跡(日向国衙跡)

Fig. 1 西都原遺跡調査地点と周辺主要遺跡位置図

S = 1/25,000

石賀平ノ下

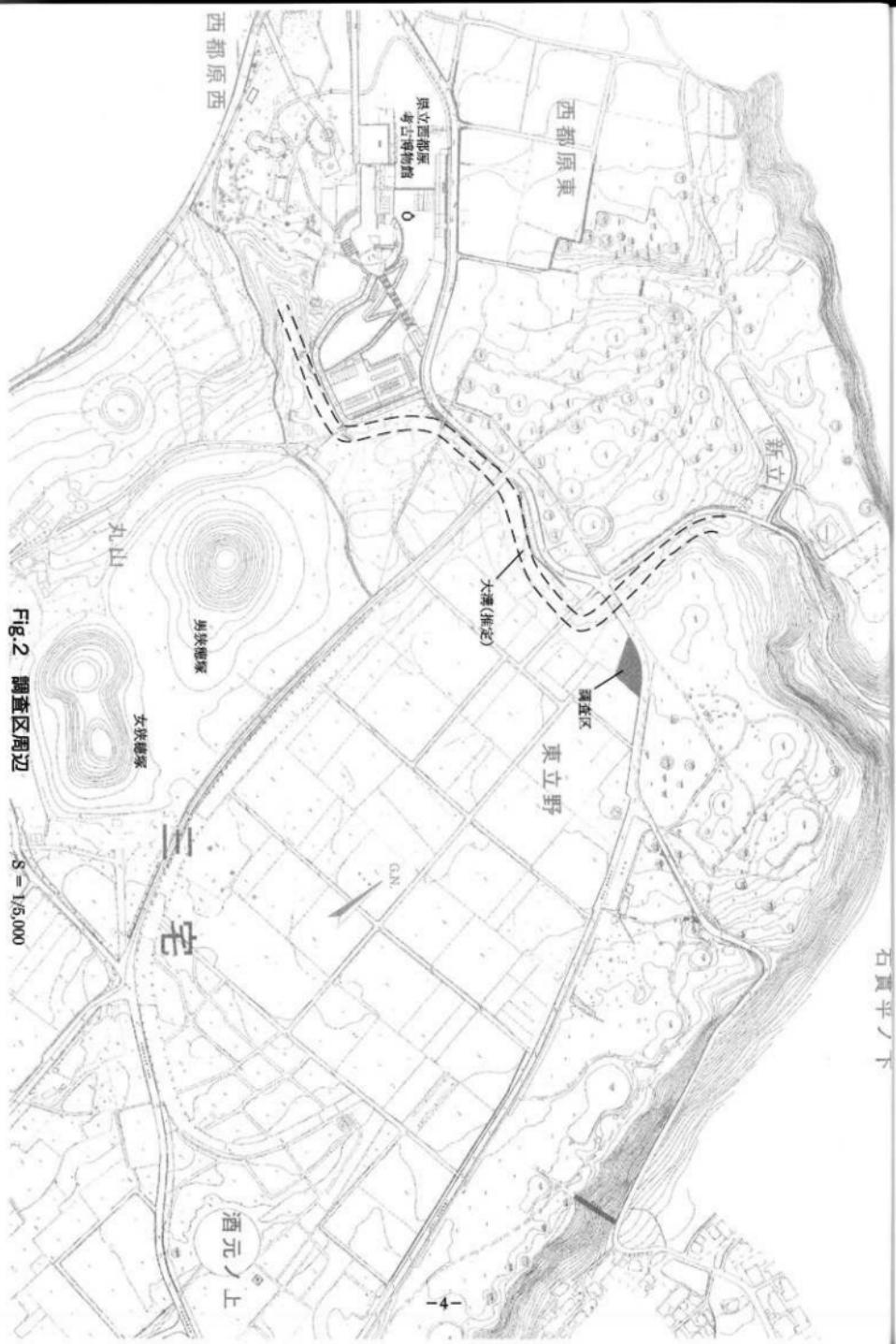
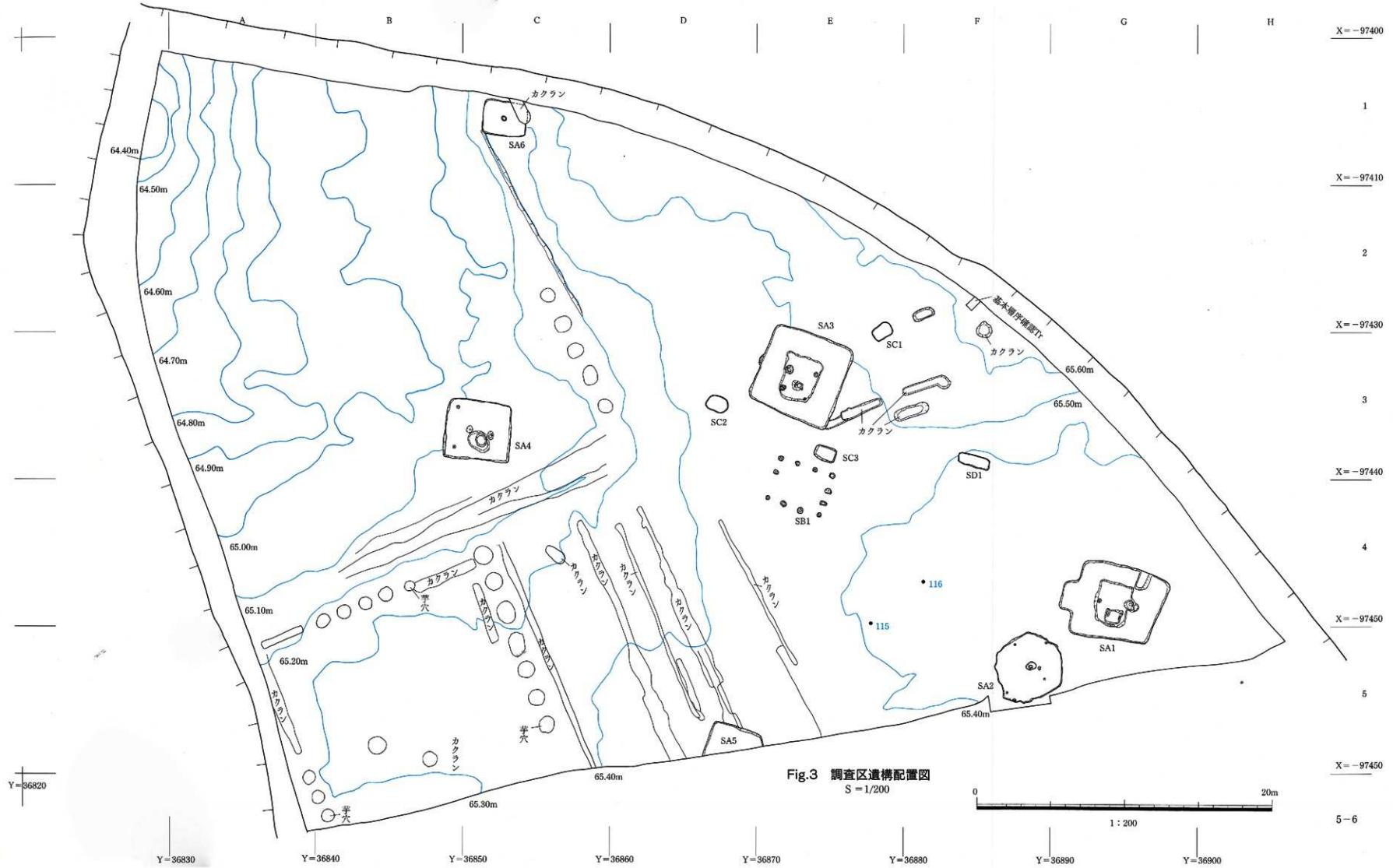


Fig. 2 調査区周辺

ス = 1/5,000



い範囲で検出されている。特に注目されるのは、本報告で取り扱う調査区周辺においてもこの当時の調査において、弥生時代中期～後期前半と見られる竪穴住居跡が2軒と土坑などが検出され、多くの遺物が出土した。本報告の調査区西側の谷状地形底面に流路と考えられる大溝が検出されていることである。本報告でまとめる調査区の台地上での空間的位置を明確にするには加味して捉えるべき成果である。

平成10年度から平成15年度まで行われたたばこ耕作組合の天地返しに伴う発掘調査では、西都原台地上を合計で約70,600m<sup>2</sup>調査し、縄文晩期1軒、弥生時代10軒、古墳時代8軒の竪穴住居跡が確認された。本調査区の遺構とも併行する時期からその後も台地上に集落が営まれたことを示す重要な成果が上がっている。

この調査はほぼ西都原台地上全域に及び、遺構の広がりが時期ごとに把握できる。

詳細は『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第44集』(2006年)で報告されるので参照されたい。

以上のことから、西都原台地上には、縄文時代から弥生時代にかけて多くの生活痕跡を示す遺構が所在していることが分かる。本調査区で検出した弥生時代の住居跡に関して概観すると、台地上の広範囲にわたり分布しており、一箇所に集中する形態ではない。

特に、弥生時代中期後半から後期前半にかけての住居跡は本調査区を含め、台地上に広い範囲で点在する様相を示す。

これに対して後続する新立遺跡や西都原地区遺跡81地点(2004年調査分)などの弥生時代終末期から古墳時代前期に比定される時期の住居跡の密度度合いは高く、多くの住居が重複して検出され、本調査区を中心とした弥生時代中期後半～後期前半にかけての住居跡を比較するとその分布状況の差異が明確になってくる。近年の調査により資料数も増加し、今後は蓄積された資料を集落としての視点から再検討しながら、遺跡内の土器編年を整備し、時期ごとの西都原台地における集落変遷、依然として不明確な集落と併行する墓制との関係を追跡していく視点が必要となろう。

本報告がその中の一資料として活用されることを期待する。

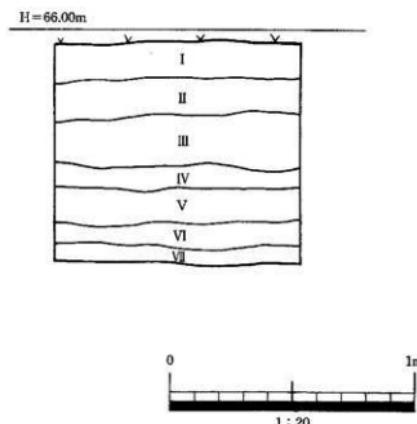


Fig.4 調査区基本層序

## 第III章 西都原遺跡の調査

### 第1節 平成15年度の調査

平成15年度の調査区は西都原台地の東北端部に位置し、現状は畠地として利用されていた。

市道291号を挟んで向かいに西都原109号墳が所在する。

総調査面積は2,397m<sup>2</sup>である。

調査区からは、縄文後・晩期の竪穴住居跡1軒、弥生時代後期初頭～前半期の竪穴住居5軒、掘立柱建物跡1軒、土坑3基、土坑墓1基を検出した。

調査の結果、アカホヤ火山灰層上面で良好な弥生時代後期前半の竪穴住居群を検出したことから、一部を除き遺構の保存を図ることを前提に調査と工事を施工することとした。

そのため竪穴住居跡は床面までの調査とし、一部を除き掘方最下面まで検出することは止めた。

### 第2節 基本層序 (Fig.4)

西都原遺跡の基本層序の観察は、調査区の北側にトレンチを設定して行った。各層とも堆積は良好で、第I層は表土で10YR3/2 黒褐色で15cm程堆積している。第II層は10YR3/1 黒褐色で17cm程堆積し遺物が入る。第III層は10YR5/8 明褐色のアカホヤ火山灰層で20cm程堆積する。第IV層は10YR2/1 黒色土で10cm程堆積する。第V層は10YR3/1 黒褐色で硬くしまるローム層であり15cm程堆積する。第VI層は10YR3/2 黒褐色で硬くしまるローム層で11cm程堆積する。第VII層は10YR4/3 にびい黄褐色で硬くしまる。遺構は第III層にあたるアカホヤ火山灰層上面で検出した。また、前述したとおり、現遺構面を保存するため、その下層は調査していない。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1.SA1 (Fig.5.6.7)

G 4～5区で検出した。調査区の東北端にある。平面形は南側に張り出し部をもつ隅丸長方形竪穴住居でA-A'間で6.7m、B-B'間で5.12mを測る。検出面からの深さは約21.3cmを測る。張り出し部は入り口の可能性がある。北側に1.28×0.83mの間仕切り状の突出壁をもつ。住居中央部は2.9×2.3mの範囲で一段低く掘り込んであり、A-A'方向が軸の2本の主柱をもつ。主柱掘方の直径は75cm、深さは80cmである。住居内の中央部掘方と外側の間にB壁側で土壁らしき仕切りがあったことを推測させる痕跡が平面に残る。中央部掘方の南壁側にはさらに一段深い掘方がある。底面にはA-A'方向に2基の掘方があり平面形は楔形を呈し、深さは約40cmを測る。何らかの掘付型構築物があったものと考えられ、掘方の形状から柱穴とは考え難い。この掘方周囲からは床面上に多くの緑色頁岩チップが散乱しており、後述する磨製石器を作成した際生じたものであろう。住居掘方周囲に柱穴や溝、周堤の痕跡はない。しかし、住居埋土の2～4層は多くの地山塊が含まれており、周囲に周堤等の構築物があったことを推測させる。住居の壁内側沿いには浅い壁帶溝が断続的に巡るが、全周しない。床面の構造はFig.6で示したとおり、住居掘方が基本層序(Fig.4)の第IV～V層まで及び、その上に住居掘方掘削の際に生じたと考えられる基本層序第III層、第IV層、第V層が混ざった土で構成された貼り床を約5cm施し、中央部では約20cm嵩上げしている。この面が硬化しており、遺物の出土状態からも床面であったと考えられる。

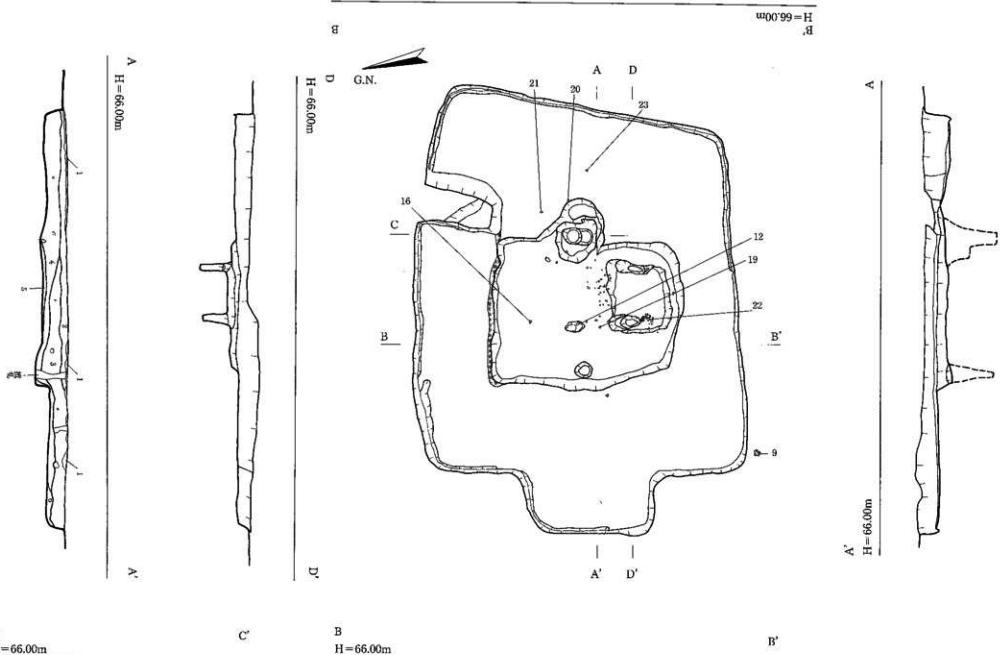
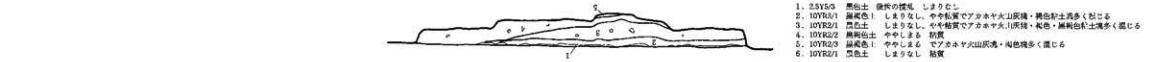


Fig. 6 住居掘方と  
貼り床の関係 S = 1/60

1. 10732/3 黄褐色・土質  
2. 10732/2 黄褐色・土質  
3. 10732/1 黄褐色・土質  
4. 2315G 黄褐色・土質  
5. 10732/3 黄褐色・土質

Fig. 5 SA1 実測図・土層図・床面遺物出土状況 S = 1/60

0 2m  
1:60

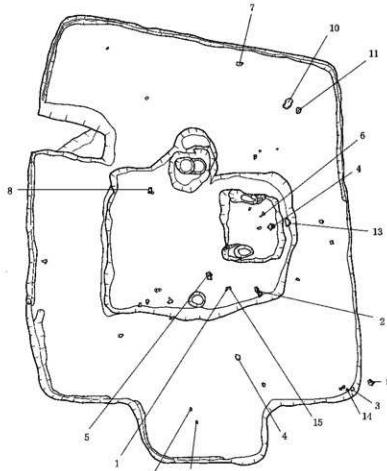


Fig. 7 埋土内遺物出土状況 S = 1/60

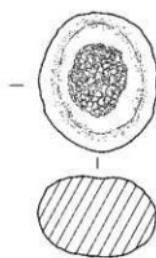
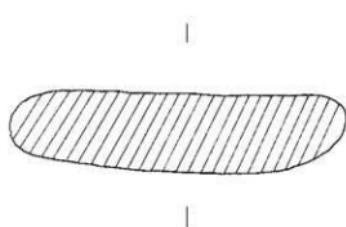
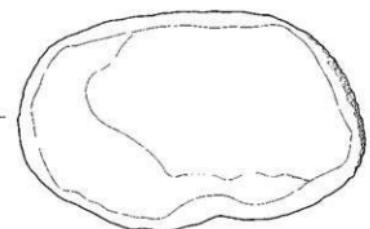
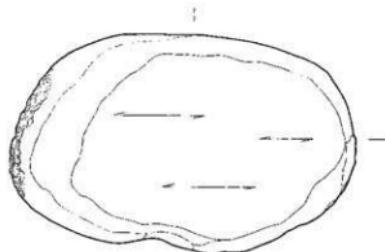
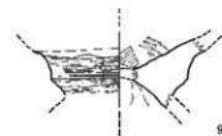
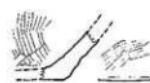
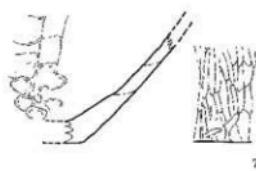
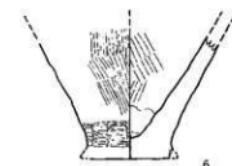
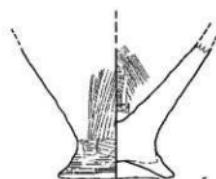
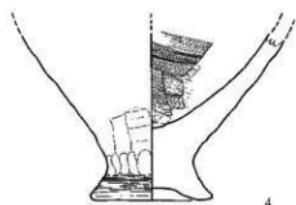
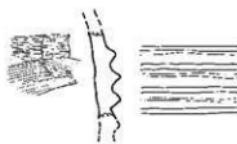
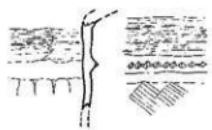
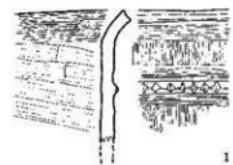


Fig.8 SA1 出土遺物実測図

(S = 1/3)

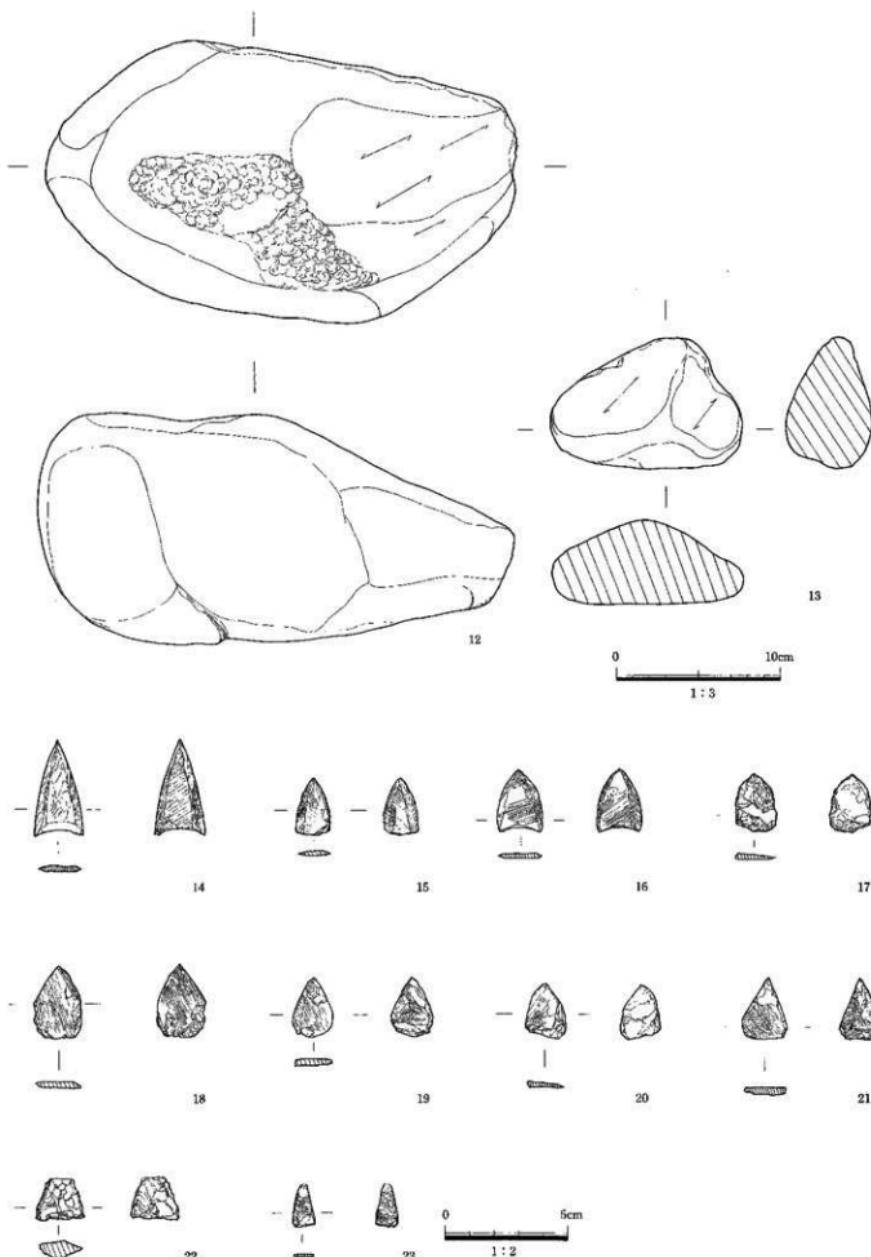


Fig.9 SA1 出土遺物実測図 2

(S = 1/3, 1/2)

## 出土遺物 (Fig.8・9)

SA1 からは土器破片・石器・剥片が埋土中と床直上で出土した。

### ・土器

1・2 は甕口縁部破片である。1 は幅 0.8cm の刻目突帯を付し、2 は 1.2cm の刻目突帯を付す。3 は壺の肩部破片で複数の突帯をもつ。4～6 は甕の底部破片で 4・5 はやや上げ底で 6 は平底、7～8 は壺の底部破片である。9 は高环の破片であろう。

### ・石器

**砂岩** 10 は砾石で表面に研磨痕跡があり、長軸 21.1cm を測る。11 は敲石で片面に敲打痕が残る。長軸 8.6cm を測る。12 は台石で長軸 28.5cm を測り床直上で出土。13 は磨石で長軸 11.6cm を測る。

**緑色頁岩** 14・15・16 は磨製石鎌完製品である。14 は二等辺三角形状を呈し、基部が鎌身部側に湾曲する（以下、凹基と表記）、 $3.9 \times 2.0\text{cm}$  を測る。15 は二等辺三角形状を呈し、基部が湾曲せず平坦で（以下、平基と表記）、 $2.4 \times 1.4\text{cm}$  を測る。16 は床直上出土で、二等辺三角形状を呈し凹基で、 $2.6 \times 1.9\text{cm}$  を測る。17～23 は磨製石鎌未製品である。17 は将棋駒形を呈し、 $2.4 \times 1.4\text{cm}$  で両面に研磨痕があるが、側面は研磨が施されていない。18 は二等辺三角形状で、 $2.9 \times 2.0\text{cm}$  で平面に研磨痕がある。19 は二等辺三角形状で  $2.4 \times 1.7\text{cm}$ 、両面に研磨痕あり。20 は三角形状で、 $2.25 \times 1.65\text{cm}$ 、平面に研磨痕がある。21 は二等辺三角形状で  $2.5 \times 1.9\text{cm}$ 、両面に研磨痕あり。22 は三角形の頂点部を欠損した剥片で、研磨は施されていない。23 は細型の二等辺三角形状を呈し、 $1.8 \times 0.9\text{cm}$  で両面に研磨痕がある。

## 2. SA2 (Fig.10)

F5 区で SA1 の南側に隣接して検出した。平面形は不整円形を呈す竪穴住居跡である。

A - A' 間で 4.85m、B - B' 間で 4.78m を測る。検出面からの深さは 22cm である。中央に 1 本の主柱をもち、掘方の直径は 55 cm、深さ 36 cm を測る。

周囲に 7 本の柱穴の可能性がある掘方が検出できたが、いずれも浅い。平面形、柱穴配置とともに床面に貼床ではなく、住居埋土にも地山塊は混ざらない点で他の竪穴住居と著しく構造が異なる。調査区内での他の住居跡との遺構の配置状況においても整合しない位置にある。掘方外側に柱穴や溝など関連遺構は検出面においてはなかった。

## 出土遺物 (Fig.11・12)

SA2 からは土器破片・石器・剥片が出土した。ほとんどが埋土中からの出土である。

### ・土器

24 は甕の肩部破片か。粗い工具ナデを器面に施す。25 は長胴型の深鉢肩部破片。内面に凹線状の粗い条痕が残る。26 は鉢型土器の口縁部か。27～29 は底部破片で、27・28 は平底で甕の底部か。29 はやや上げ底を呈す底部で器面調整は外面に細かい磨きが施される。

### ・石器

**頁岩** 30～32 は石錘である。両端を打ち欠きにより調整する。30 は  $5.7 \times 5.0\text{cm}$ 、31 は 1/3 が欠損、32 は  $7.6 \times 7.4\text{cm}$  の円形である。

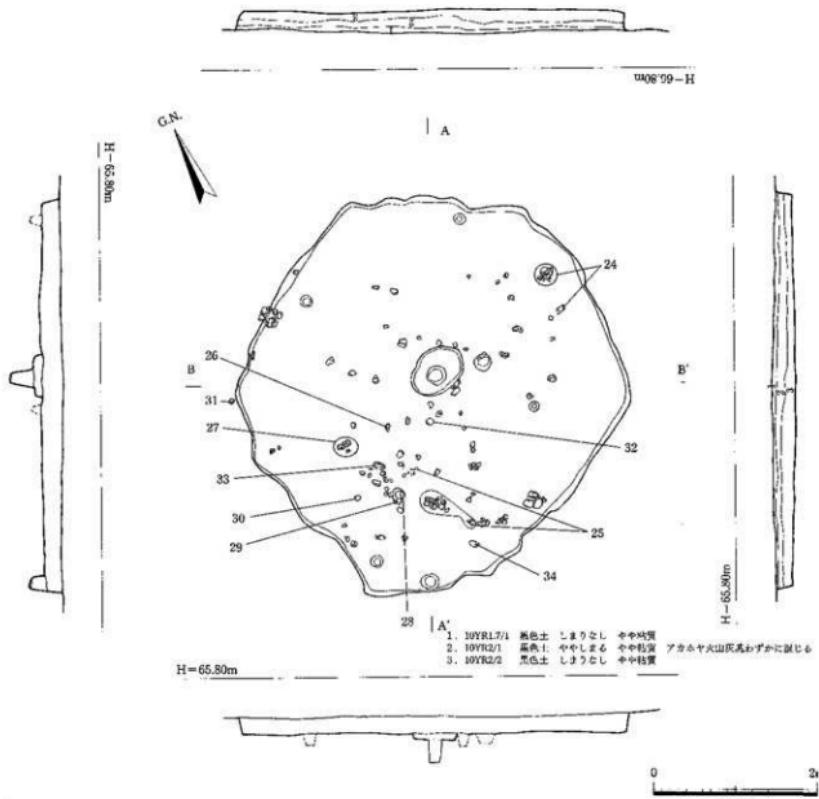


Fig.10 SA2 実測図 (S=1/60)

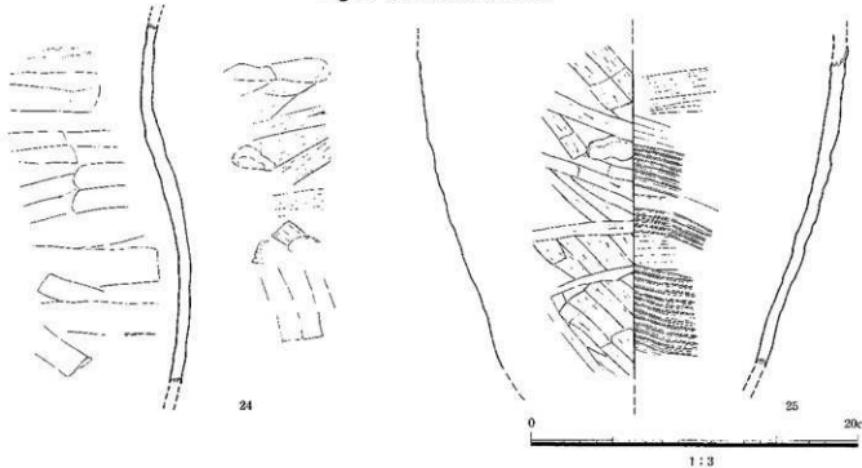


Fig.11 SA2 出土遺物実測図 1 (S=1/3)

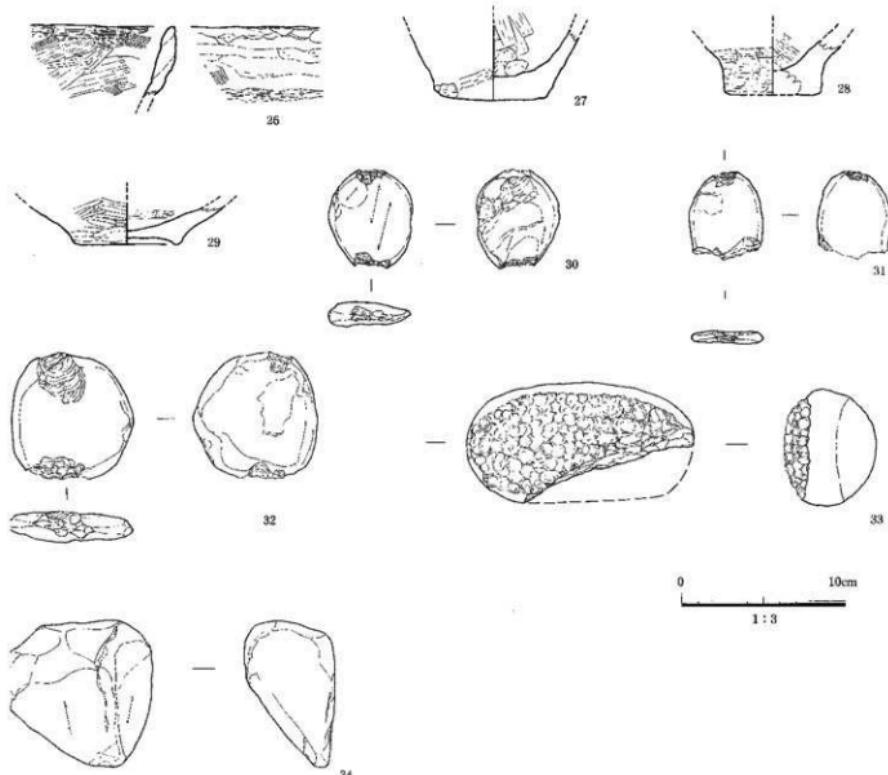


Fig.12 SA2 出土遺物実測図 2 (S=1/3)

**尾鈴山酸性岩類** 33は敲石である。欠損するが片面に敲打痕が残り、長軸 13.9cm を測る。34は磨石である。三角形状を呈し、表面に研磨痕がある。

**砂岩** 碓とくらかの加工で生じたと見られる立方形の剥片が出土した。(PL9.45 SA2 出土剥片 1)

### 3. SA3 (Fig.13)

E3 区で検出した。平成 12 年度に行われた確認調査に際に検出されていた住居跡である。平面形は隅丸方形の竪穴住居で A - A' 間で 5.94m、B - B' 間で 5.85m を測り、最も大きな規模をもつ。周囲には SC3 基、SB1 棟が付随する。壁際で掘方の深さは検出面から約 55cm である。中央部は 2.45 × 3.13m の方形で周囲より 11 ~ 20cm 深く掘り込まれ、そのほぼ中央にピットと四隅に 4 本の主柱をもつ。4 本主柱構造の住居はこの一軒のみである。柱穴の径は 20 ~ 25 cm で、柱穴掘方の径は 55 cm である。深さは約 50cm である。北側には被熱による床面の変色が見られた。西側にわずか

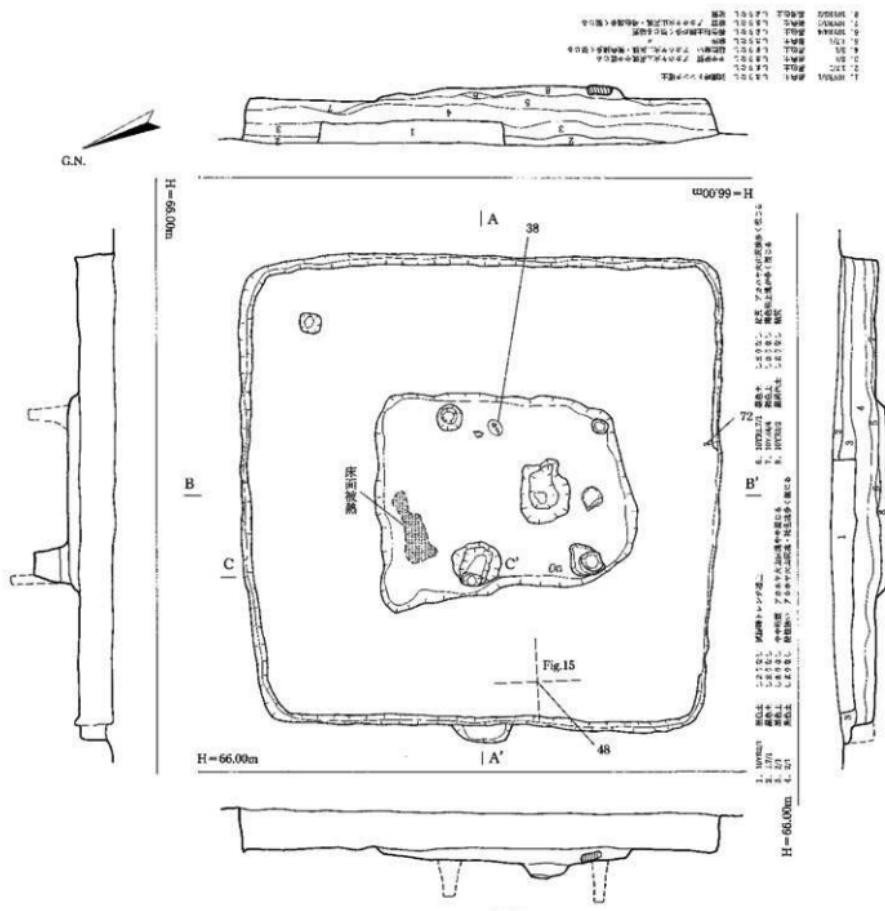


Fig.13 SA3 実測図 (S=1/60)

0  
2m  
1 : 60

H = 65.50m  
1. 10YR 4/2 茶色土にアカモキの山形塊。褐色が多めに見こえてしまふ。(80cm)  
2. 10YR 4/2 黄褐色土にアカモキの山形塊。褐色が少く見こえてしまふ。(80cm)

Fig.14 住居掘り方と貼床の関係(C-C'間) (S=1/60)

0  
2m  
1 : 60

Fig.15 床直上出土状況 (Fig.18 - 48) (S=1/20)

0  
1m  
1 : 20

な張り出し部がある。Fig.14 で示すとおり、床構造は SA1 と同じく基本層序の第V～VI層まで掘り込んだ底面に貼床する。厚さは約 10cm を測る。住居掘方周囲に柱穴・溝・周堤の痕跡は検出面においてはない。

埋土は 8 層に分けられ、3～4 層は地山塊（基本層序第III・IV・V・VI）が多く混じる。

### 出土遺物 (Fig.16・17・18・19・20)

遺物は埋土中と床直上で出土した。

#### ・土器

35 は甕口縁部破片で復元径 21.0cm を測り、摩滅が著しい。36 は壺の肩部破片で断面三角形状の突帯をもち、器面にミガキが施される。37 は壺口縁部破片で、やや肥厚した口唇部にハケの後のハの字状の連続施文が施される。38 は在地産瀬戸内系土器の壺破片と見られ、頸部から口縁部への屈曲がシャープで、口縁端部に凹線が施されるが不明瞭で擬凹線である。肩部に煤が付着する。復元径 18.6cm を測る。器面を細かい単位の丁寧なハケで仕上げる。39 は壺の底部で平底を呈し、底径 7.4cm を測る。40 は小型の壺破片で、復元底径 4.4cm を測る。器面は細かいミガキが施される。41 は壺底部破片で、復元底径 3.6cm を測る。

42～48 は甕である。42 は口縁部破片で復元径 31.5cm、均等な刻目の幅 1.3cm の突帯を口縁下端から約 4.6cm 下に付す。43 は口縁部破片で、端部が内側に湾曲する。44 は口縁部破片で復元径 30.0cm を測り、不均等な刻目の幅 1.0cm の突帯を口縁下端から 4cm 下に付す。45 は口縁部破片である。46 は口縁部破片で復元径 28.6cm を測り、幅 1.3cm の刻目突帯を口縁下端から 4.3cm 下に付す。47 は幅 1.0cm の突帯部を含めた胴部破片である。48 は床直上で出土した甕 (Fig.15) で、頸部から胴部がやや外に膨らむ。口径は 34.3cm、底径 8.6cm、器高 38cm を測る。口縁部はくの字型に屈曲し、口縁下端から 3.5cm 下に幅 1.5cm の刻目突帯を付す。外面を単位の短いハケで仕上げる。49～54 は甕の底部破片である。49 は上げ底で底径 6.2cm を測る。50 はやや上げ底気味で底径 5.5cm を測る。51・52 は底部を欠損している。53 は厚手の底部で底径 7.4cm を測り、大型品の底部であろう。54 は平底で復元径 6.0cm を測る。

#### ・石器

**砂岩** 55、56 は砥石で、55 は長軸 38cm を測り、両面に研磨痕が残る。56 は長軸 27.1cm を測り、片面が平坦で研磨痕が残る。57 は敲石で側面と平面に部分的に敲打痕が残る。59 は砥石で、片面が緩やかにくぼみ、研磨痕が残る。64 は磨石で長軸 15.2cm、全面に磨痕あり。65 は砥石で全面に研磨痕あり。66 は台石で欠損しているが片面の一部にくぼみがあり、そこに研磨痕が残る。

**尾鈴山酸性岩類** 61 は磨石で 5.4cm の円形を呈し、全面に研磨痕が残る。

**黒色頁岩** 58 は砥石で棒状を呈し、全面に研磨痕がある。60 は砥石で片面がくぼみ研磨痕がある。62 は石錐で両端を打ち欠く。平面には研磨痕が残るため、砥石に転用されたものか。63 は磨石で全面に研磨痕が残る。

**黒色頁岩製石鐵** 68・69 は大型の磨製石鐵完製品で、68 は二等辺三角形状を呈し、凹基で、 $3.6 \times 1.85\text{cm}$  を測る。69 は二等辺三角形状を呈し、凹基で、 $4.5 \times 1.8\text{cm}$  を測る。79 は縦長剥片である。両面とも剥離面を残したまま研磨されず、 $3.5 \times 2.2\text{cm}$  を測る。

**緑色頁岩** 67・70～73 は磨製石鐵の完製品である。67 は大型の二等辺三角形状を呈し、凹基で 3.95

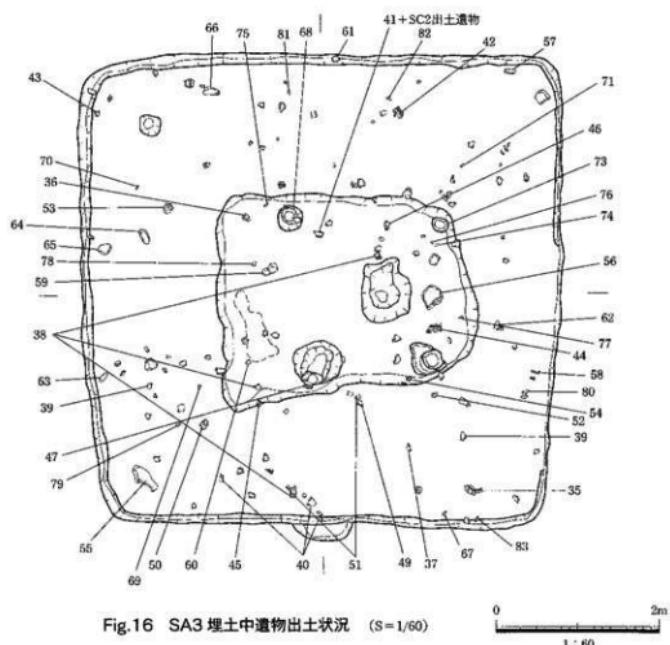


Fig.16 SA3 埋土中遺物出土状況 (S=1/60)

0 2m  
1 : 60

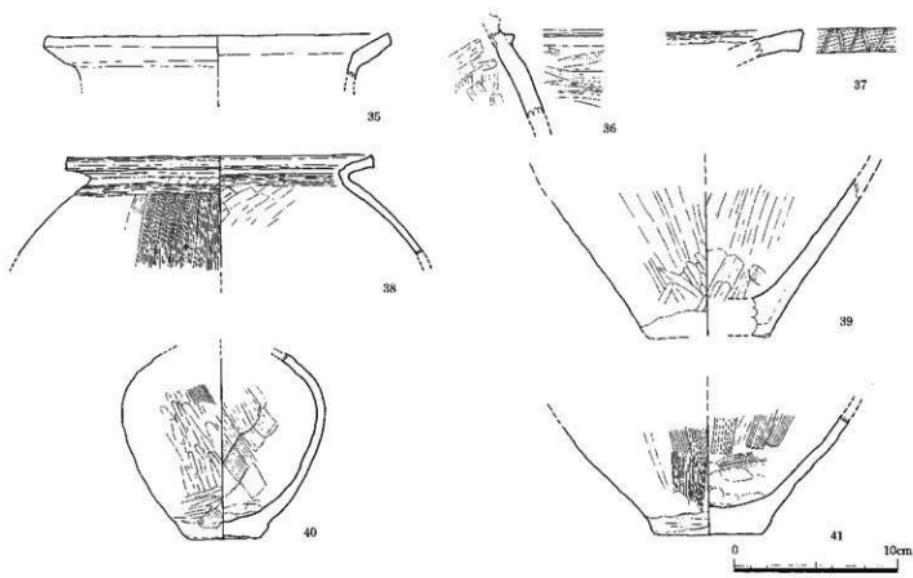


Fig.17 SA3 出土遺物実測図 1 (S=1/3)

0 10cm  
1 : 3

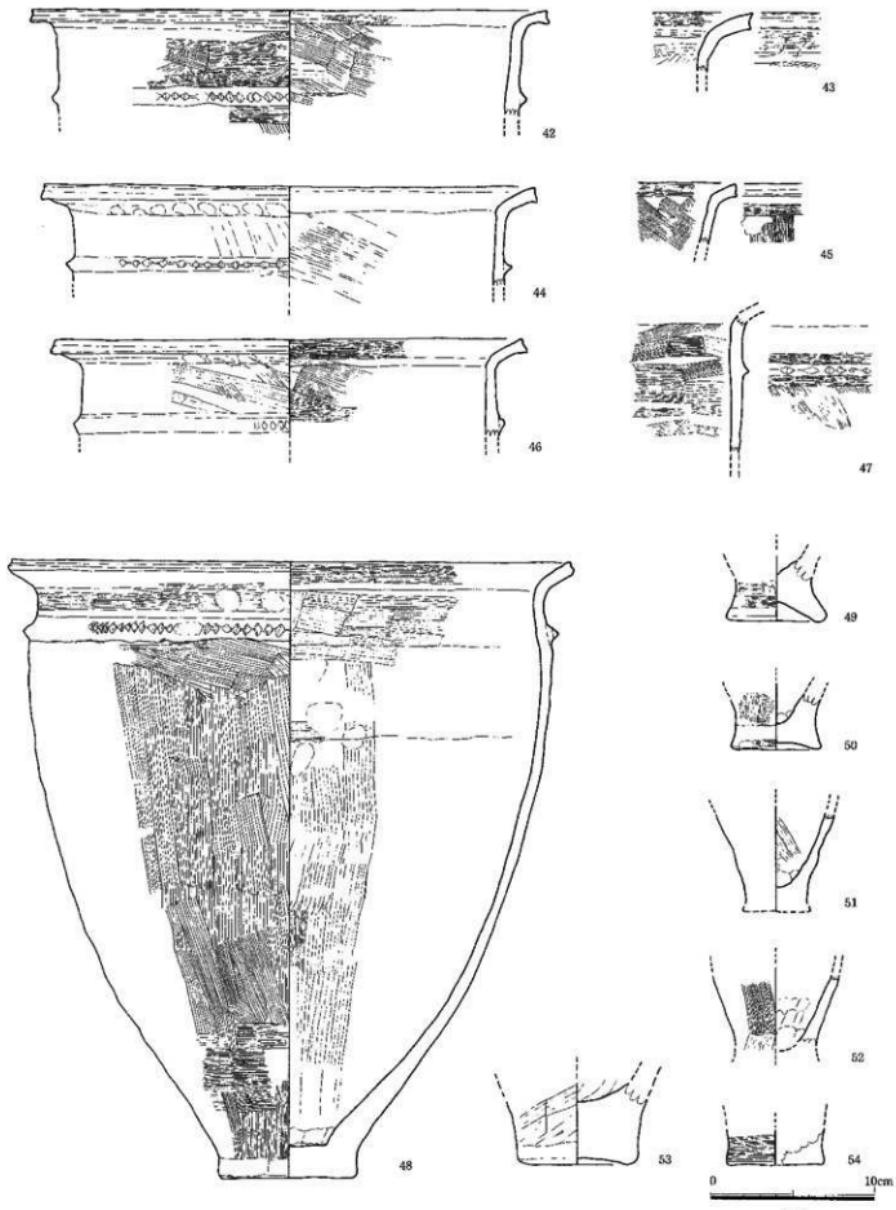


Fig.18 SA3 出土遺物実測図 2 (S=1/3)

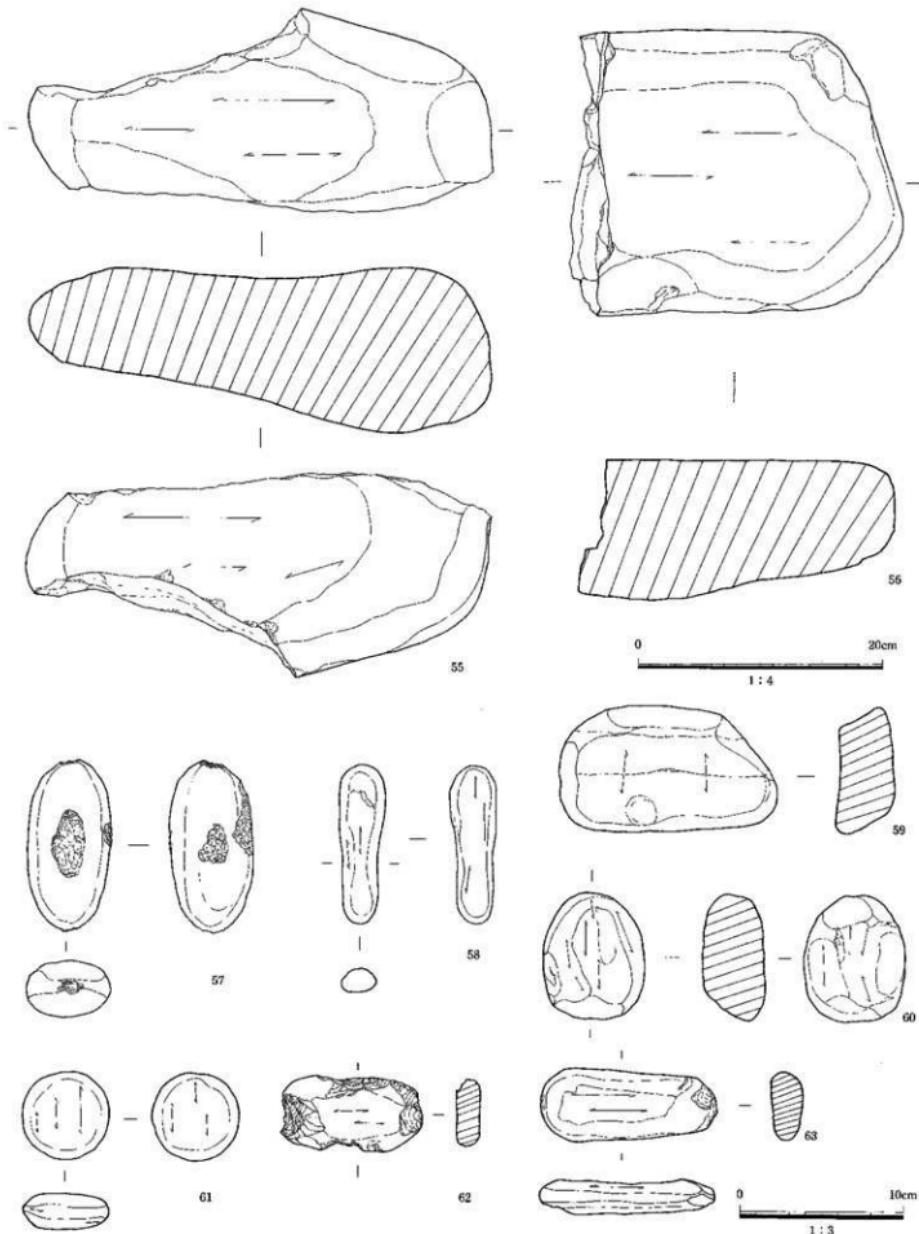


Fig.19 SA3 出土遺物実測図 3 (S=1/3 - 1/4)

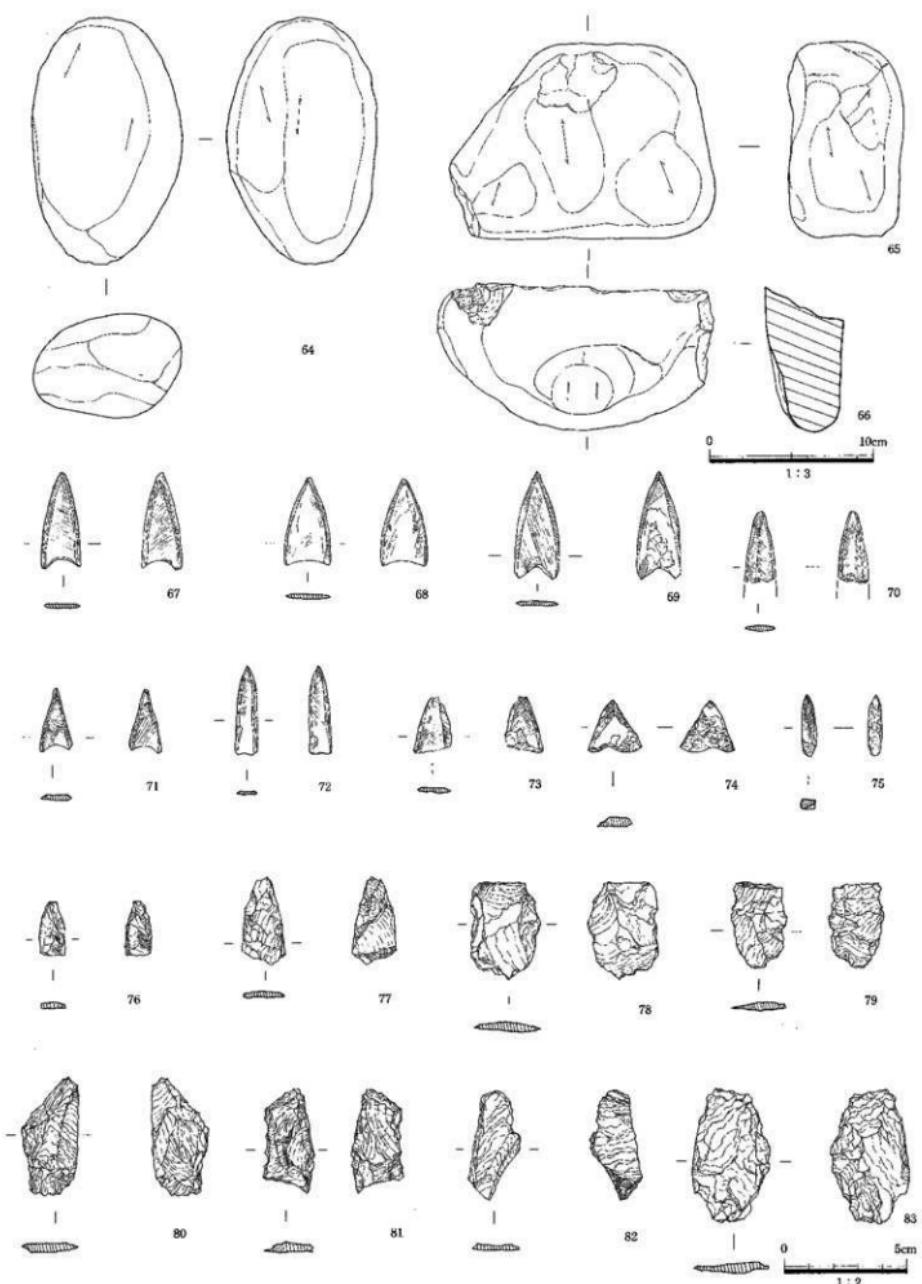


Fig.20 SA3 出土遺物実測図 4 ( $S = 1/2 + 1/3$ )

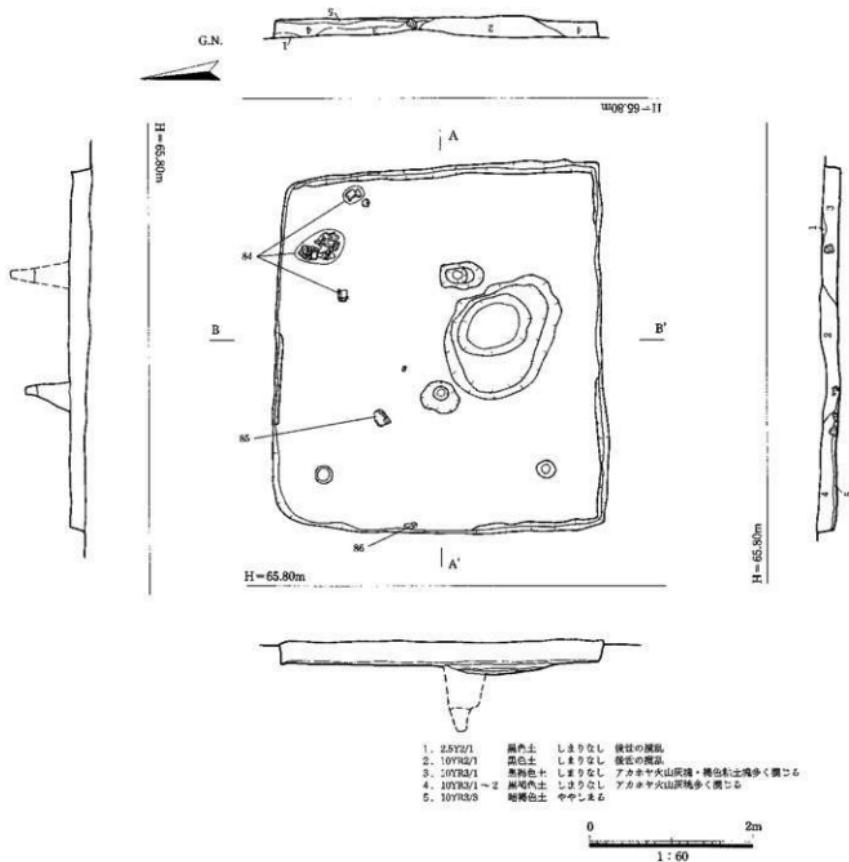


Fig.21 SA4 実測図 (S=1/60)

× 1.6cm を測る。70は基部を欠損するが二等辺三角形状を呈し、断面が菱形状で、研磨の違いか研ぎ直しによるものか。71は二等辺三角形状を呈し、凹基で 2.1 × 1.35cm を測り、幅が狭く小型であるが、研ぎ直しによる消耗の可能性がある。72は他と異なり幅の狭い二等辺三角形状を呈し、基部は明確でない凹基で 3.65 × 0.9cm を測る。73は欠損しているが刃部が研ぎだされている。74～77は磨製石器の未製品である。74は三角形状を呈し、やや凹基気味で 2.1 × 2.2cm を測り、両面に研磨痕がある。75は棒状を呈し、両面に研磨痕がある。76は二等辺三角形状を呈すが小型で 2.3 × 1.05cm を測る。77は二等辺三角形状を呈し、3.6 × 1.7cm で両面に研磨痕がある。78・80～83は長方形剥片である。剥離面を残し、三角形状に整えておらず、研磨も施されていない。他にも図化しなかったが剥片やチップが出土した。

#### 4.SA4 (Fig.21)

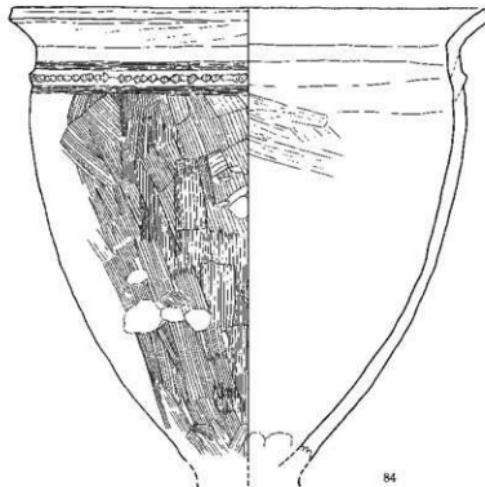
C3 区で検出した。隅丸方形の竪穴住居跡で A-A' 間で 4.5m、B-B' 間で 3.97m、壁際で掘方の深さは 25cm を測る。中央に 2 本の主柱をもち、掘方の直径は 52 cm、深さは 78cm を測る。西壁側に 2 つの側柱らしき掘方を検出したが掘方の深さは 10cm 程度浅い。主柱の間に南壁に向けて後世の搅乱と考えられる掘方がある。壁際には浅く、幅の狭い壁溝らしき遺構があるが全周しない。床構造は保存のため裁ち割らなかったが、柱穴掘方部分で観察すると、基本層序の第 IV～V 層まで掘り込んだ底面に地山塊混じりの土で貼床されていた。

住居の周囲に柱穴・溝・周堤などの関連施設の遺構は検出面においてはなかった。埋土は 5 層に分けられ 3・4 層において地山塊が非常に多く混じる。

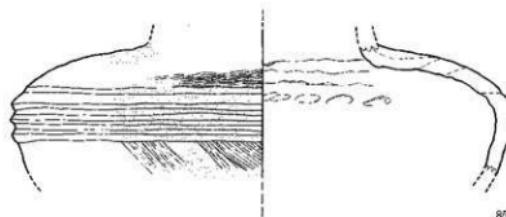
#### 出土遺物 (Fig.22)

##### ・土器

84 は甌である。口径 28.8cm を測り、幅 1.1cm の刻目突帯を付す。表面をやや粗いハケメで仕上げる。底部は欠損。刻目突帯を付した部分の下部がややふくらみ胴部最大径 26.8cm を測る。85 は瀬戸



84



85

86

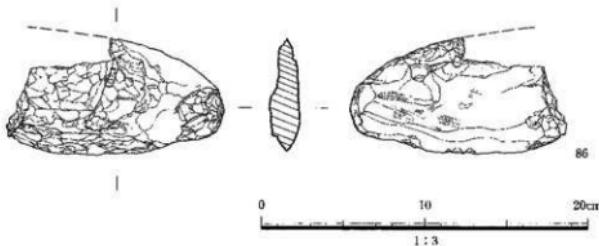


Fig.22 SA4 出土遺物実測図 (S-1/3)

内系の長頸壺を在地の胎土により製作したものの胴部破片と考えられる。胴部に3条の突帯が付される。復元で胴部径30.8cmを測る。器面に赤色塗彩が施された痕跡が伺える。

・石器

86は黒色頁岩製の磨製石斧未製品か。約1/3を欠損する。表面に一部研磨痕跡が見られる。

## 5. SA5 (Fig.23)

調査区の南端D5区に半分のみかかって検出された。隅丸方形の竪穴住居でA-A'間で2.4mを測る。壁際で掘方の深さは52cmで柱穴は検出できなかった。床は貼床である。壁際に沿って6cm程の浅い壁溝が巡る。住居の周間に柱穴・溝・周堤などの関連施設は検出面においてはなかった。北側から後世の攪乱と考えられる溝に切られていたが耕作時のものと考えられ浅く、遺構に与える影響はなかった。

土層を観察すると6・7層に地山塊が多く混じる。1～3層などは後世の攪乱によるものである。  
出土遺物 (Fig.24)

・土器

87は甕である。口径21.1cm、底径5.7cm、器高23cmを測り、器面を細かい単位の縦ハケで仕上げる。底部付近は二次加熱による赤色化が見られ、器面が剥離する。88・89は甕破片で88は復元口径28.6cmを測り、幅1.1cmの刻目突帯を付す。89は幅0.8cmの刻目突帯を付す。91は器種不明だが平底の底部で復元径14.0cmを測る。

・石器

緑色頁岩 90は長方形剥片である。5.2×3.8cm、厚さ0.5cmである。

## 6. SA6 (Fig.25)

C1区で検出した。今回の調査で最も小さな竪穴住居である。隅丸方形の竪穴住居でA-A'間で2.9m、B-B'間で2.3mを測り、中央に1本の主柱をもち、掘方の直径は32cm、深さは77cmを測る。壁際で掘方の深さは50cmを測る。床は地山塊の混じる貼床で、柱穴掘方部分で観察すると約15cmの厚さである。北側を後世の攪乱で切られるが浅い掘方のため住居に対する影響は少なかった。

出土遺物 (Fig.26)

・土器

92は甕の破片で摩滅が著しい。93は甕の底部破片である。復元径7.2cmを測る。

・石器

黒色頁岩 94は横長剥片で、3.4×5.7cmを測る。

緑色頁岩 95は二等辺三角形状を呈すやや凹基の磨製石鏟の完製品で3.5×1.75cmを測る。

## 7. SB1 (Fig.27)

SA3の南隣接して検出した掘立柱建物である。南北は東側で3間分、東西も3間分確認された。建物規模は南北で3.1m、東西で4.0mである。柱穴の掘方は25～40cmの円形で深さ35cmである。

西側が2間と一本分柱が足りない。ここでは掘立柱建物として報告するが柱穴径も小さいため高床式の建物ではなく、平地式の施設である可能性が高い。

## 8. SC1 (Fig.28)

SA3の北側で検出した。1.4×0.94mの方形の土坑で深さ32cmを測る。底面は平坦である。

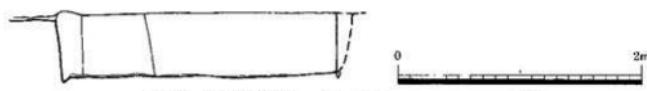
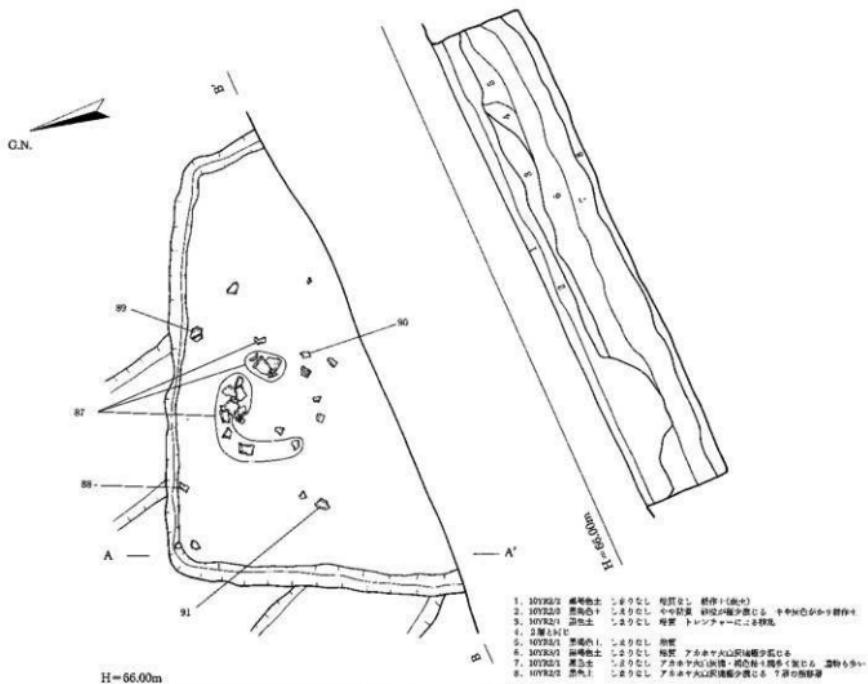


Fig.23 SA5 実測図 (S=1/40)

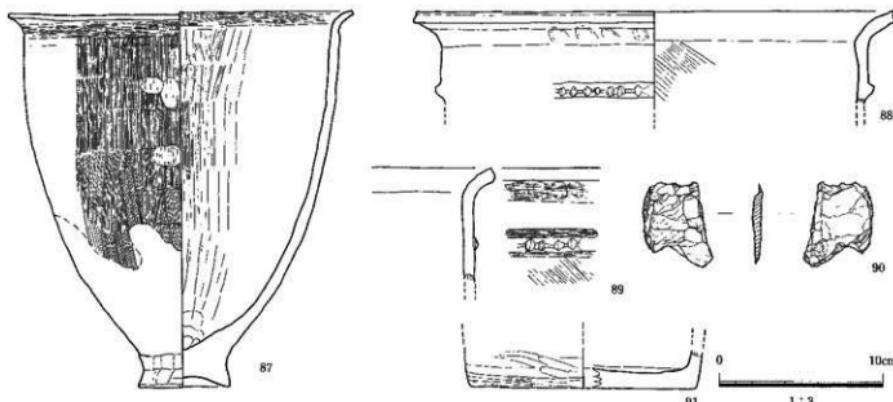


Fig.24 SA5 出土遺物実測図 (S=1/3)

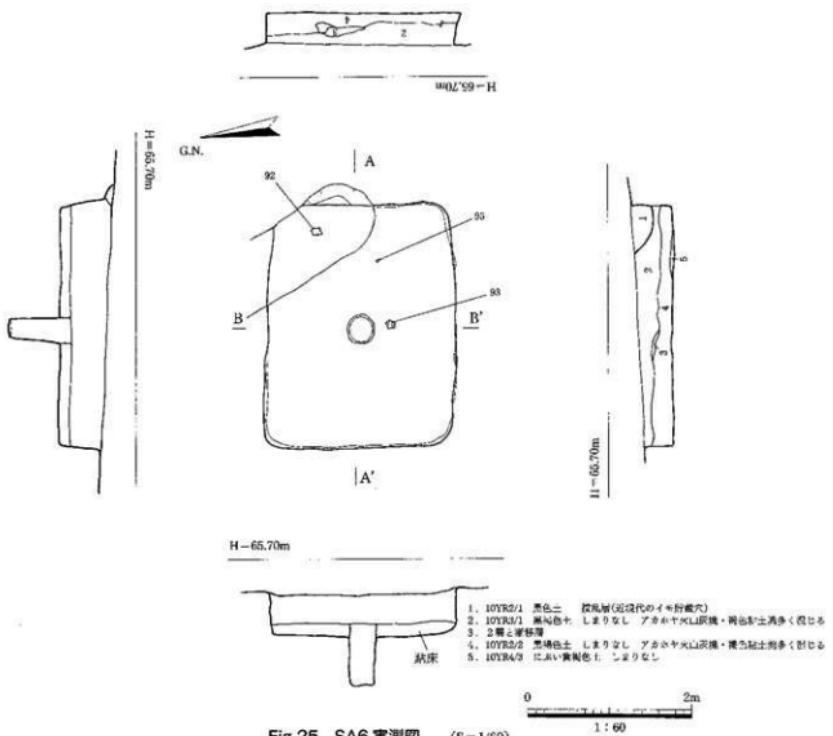


Fig.25 SA6 実測図 (S=1/60)

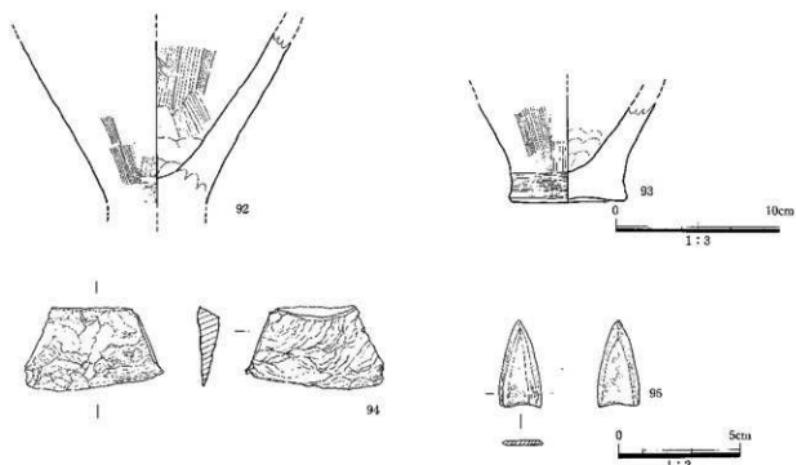


Fig.26 SA6 出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)

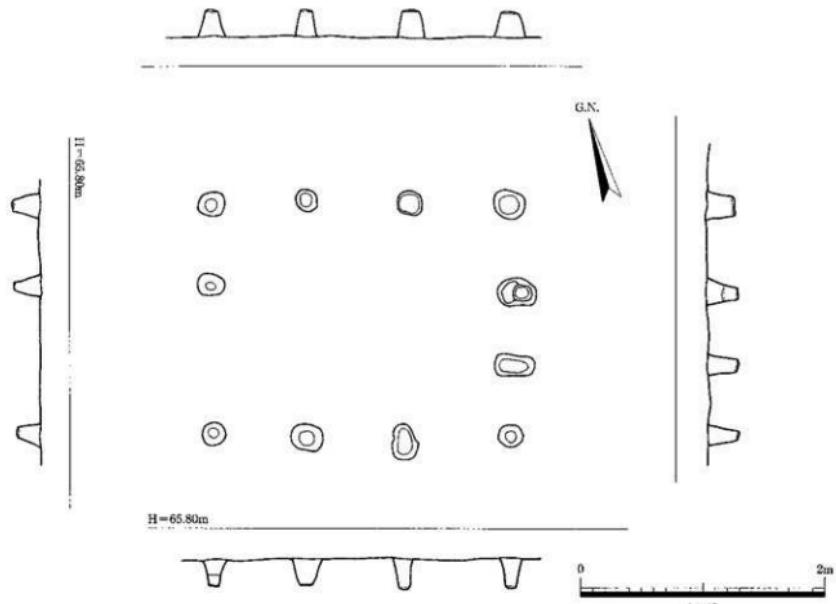


Fig.27 SB1 実測図 (S=1/40)

1. 10YR2/1 黒色土 しまりなし やや粘質 アカホヤ火山灰堆積じる
2. 10YR3/1 黒褐色土 しまりなし
3. 10YR2/2 黒色土 しまりなし アカホヤ火山灰堆積・雨熱粘土多く混じる

1. 10YR2/1 黒色土 しまりなし アカホヤ火山灰堆積じる
2. 10YR3/2 黒褐色土 しまりなし アカホヤ・褐色粘土多く混じる
3. 10YR2/1 黒色土 しまりなし

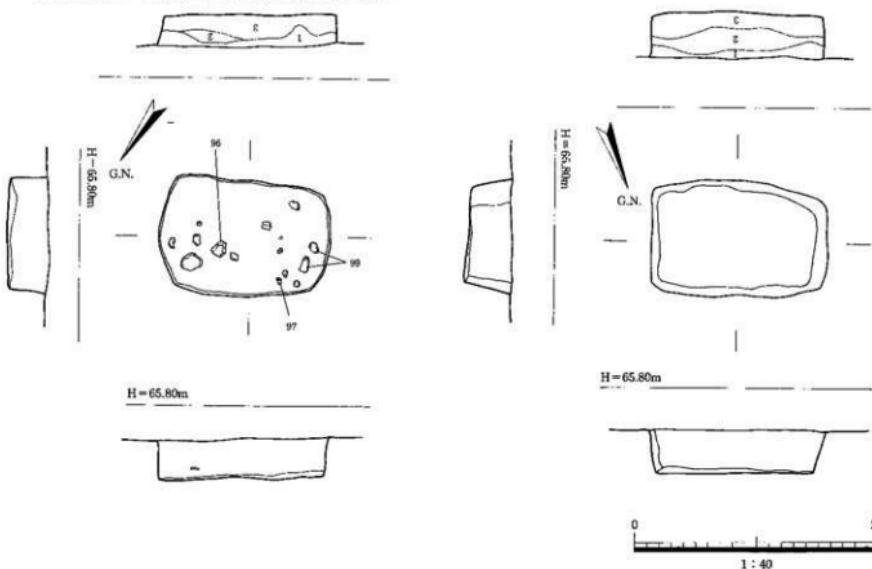


Fig.28 SC1・3 実測図 (S=1/40)

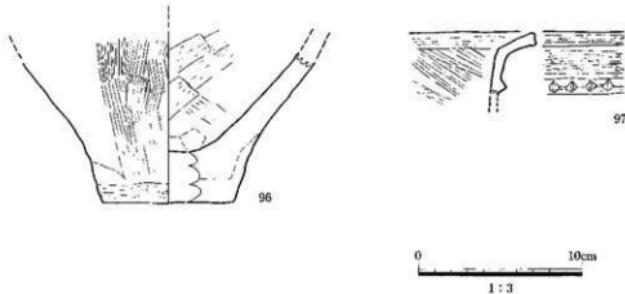


Fig.29 SC1 出土遺物実測図 (S-1/3)

埋土中より、遺物が出土した。

#### 出土遺物 (Fig.29)

96は壺の底部破片で復元径 8.1cm である。97は甕口縁部破片で幅 0.9cm の刻目突帯を付す。

#### 9. SC2 (Fig.30)

SA3 の西側に隣接して検出した。 $1.5 \times 1.06m$  の楕円形で深さ 43cm を測る。埋土の下層から底面にかけて集中して土器片が多量に出土した。遺物は層状に堆積するように出土したため、2面に分けて記録した。遺物の中には後述するように、SA3 の埋土中出土遺物と接合するものや、SC1 埋土中出土遺物と接合する資料がある。また、出土遺物は多く接合するが、兜形になるものはない。

#### 出土遺物 (Fig.31・32・33)

##### ・土器

98は東九州系の壺で頸部に幅 0.7 ~ 0.9cm の細めの 4 条の突帯とその下部に 0.8cm 程の浮文を付す。口縁と底部は欠損していた。胴部の最も膨らむ部分に 2 条と 3 条の突帯を付す。胎土色調は 2.5Y3/1 黒褐色で、緻密な異質の胎土を呈す。SA3 埋土中出土遺物と接合した。99は瀬戸内系土器の影響をうけたと考えられる壺で、口縁端部がやや上方に摘み上げられるような形で肥厚するが凹線などは見られない。頸部に幅 0.9cm の刻目突帯を付す。口径 18.2cm で SC1 出土遺物と接合した。100は壺の口縁部から肩部の破片で摩滅が著しい。やはり口縁端部がつまみ上げられ、肥厚する。101は甕破片で、幅 1.2cm の刻目突帯を付す。口縁部の屈曲は緩やかである。102は平底の底部破片で底径 5.0cm を測る。104・105は大型甕で 104は口縁部～胸部である。口径 47.2cm、口縁部は緩く、くの字状に外側へ屈曲し、頸部に断面三角形で幅 3.2cm の突帯を付す。器面はハケ、ハケ工具とは異種の工具ナデの後、ミガキで調整される。SA3 埋土中出土遺物と接合した。105は口径 43.1cm、口縁部は逆 L 字状に屈曲し、口縁部下端から 3.5cm 下に断面三角形の突帯を付す。器面はハケ、ハケ工具とは異種の工具ナデで調整される。

#### 10. SC3 (Fig.28)

SA3 と SB1 の間で検出した。 $1.45 \times 0.95m$  の方形で深さ 34cm である。底は平面である。遺物は埋土中から弥生土器破片が出土したが、図化し得るものではない。

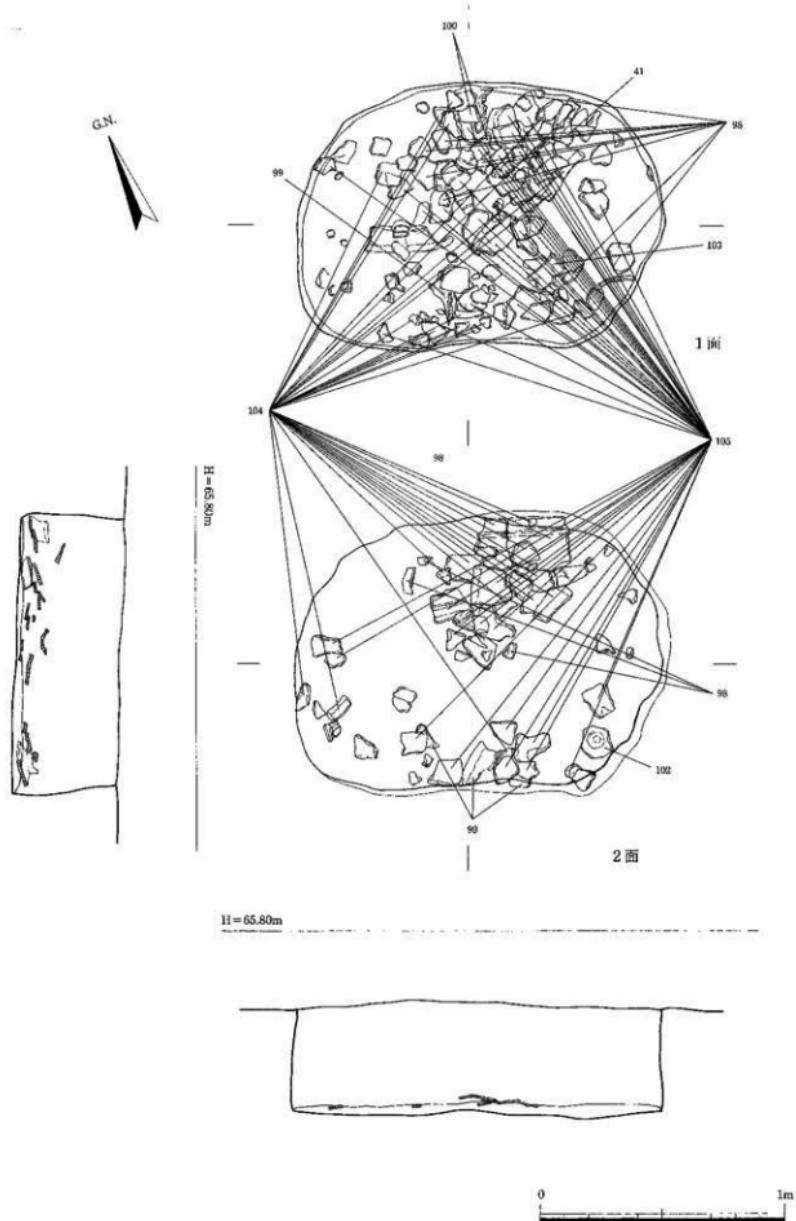
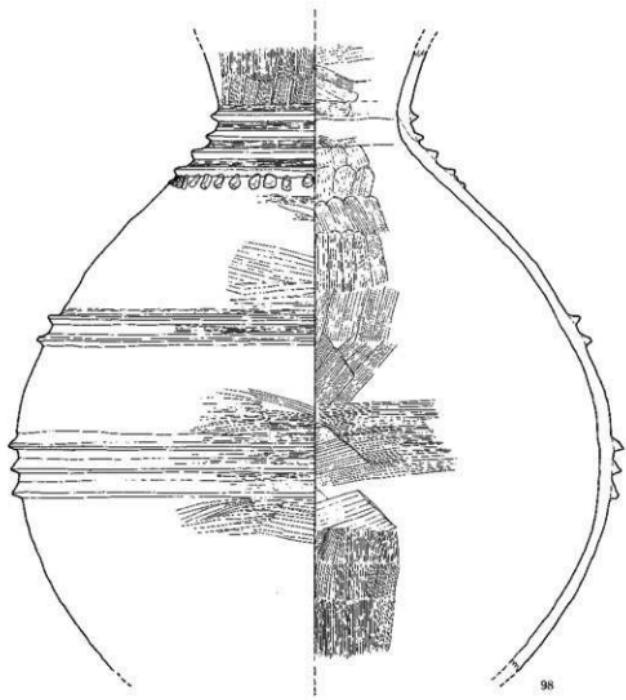


Fig.30 SC2 実測図 ( $S = 1/20$ )



1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

319

320

321

322

323

324

325

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

337

338

339

340

341

342

343

344

345

346

347

348

349

350

351

352

353

354

355

356

357

358

359

360

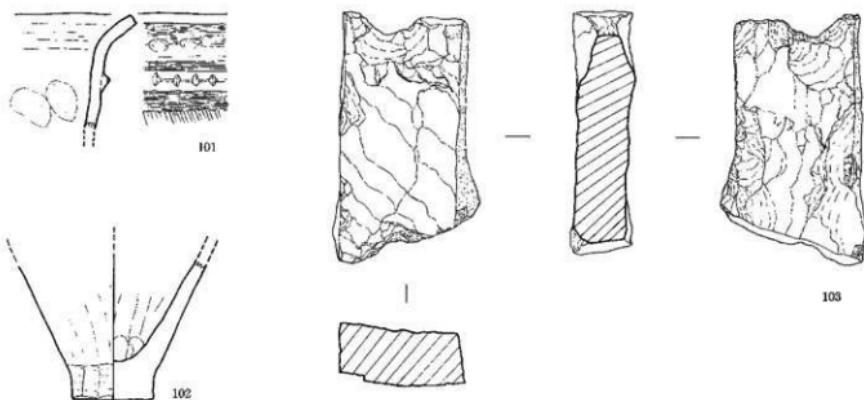
361

362

363

364

3



0 20cm  
1 : 3

Fig.32 SC2 出土遺物実測図 2 (S=1/3)

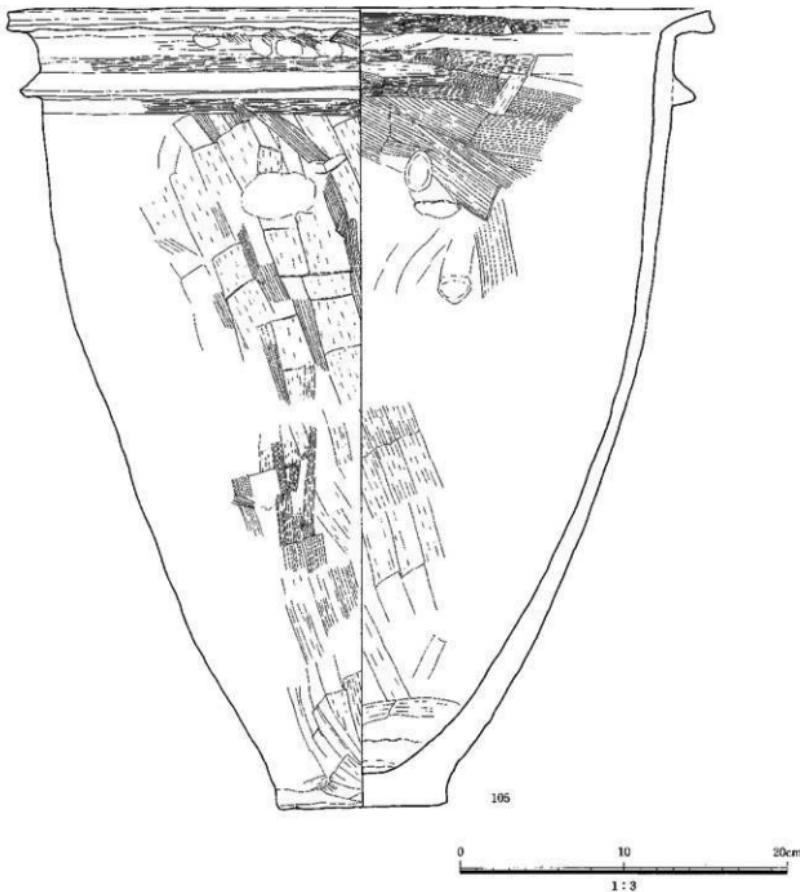


Fig.33 SC2 出土遺物実測図 3 (S=1/3)

### 11. SD1 (Fig.34)

SA1 と SA3 の間で検出した。4.28 × 1.6m、深さ 51cm の長方形を呈し、底面は平坦である。遺物と埋土の堆積状況と掘方の平面形から、他の土坑とは異なる様相を重視し、ここでは土壙墓として報告する。ただし、埋葬に伴う明らかな痕跡は確認していない。遺物は埋土 2・3 層中にレンズ状に堆積した状態で多量に出土した。

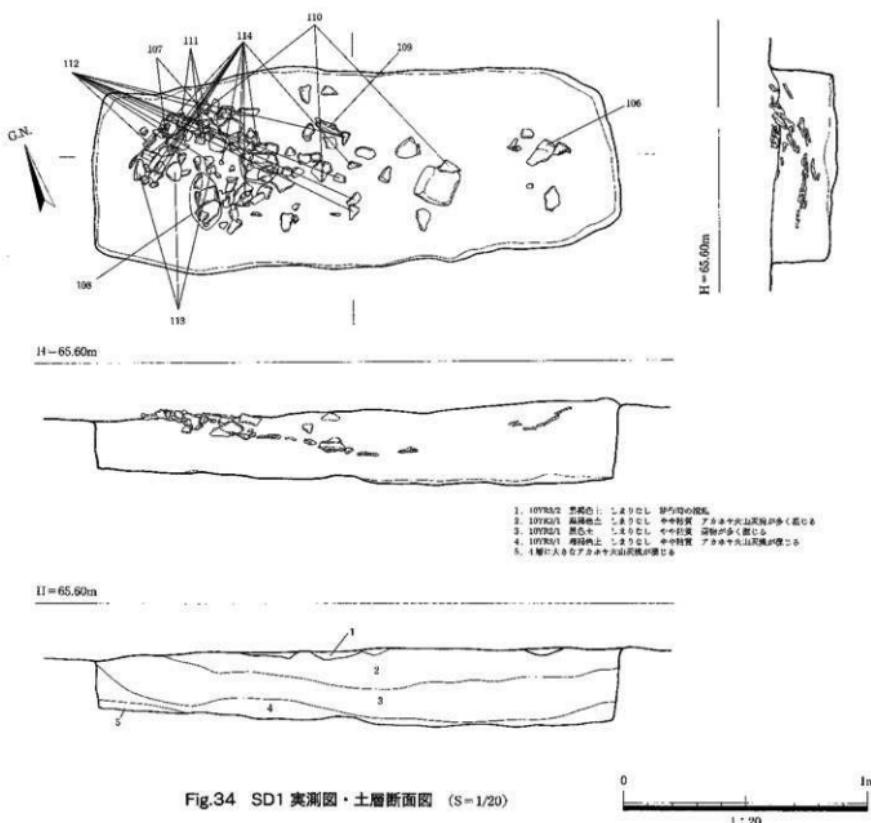


Fig.34 SD1 実測図・土層断面図 (S=1/20)

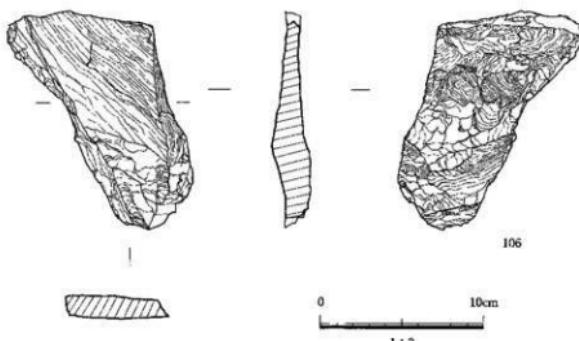


Fig.35 SD1 出土遺物 (S=1/3)

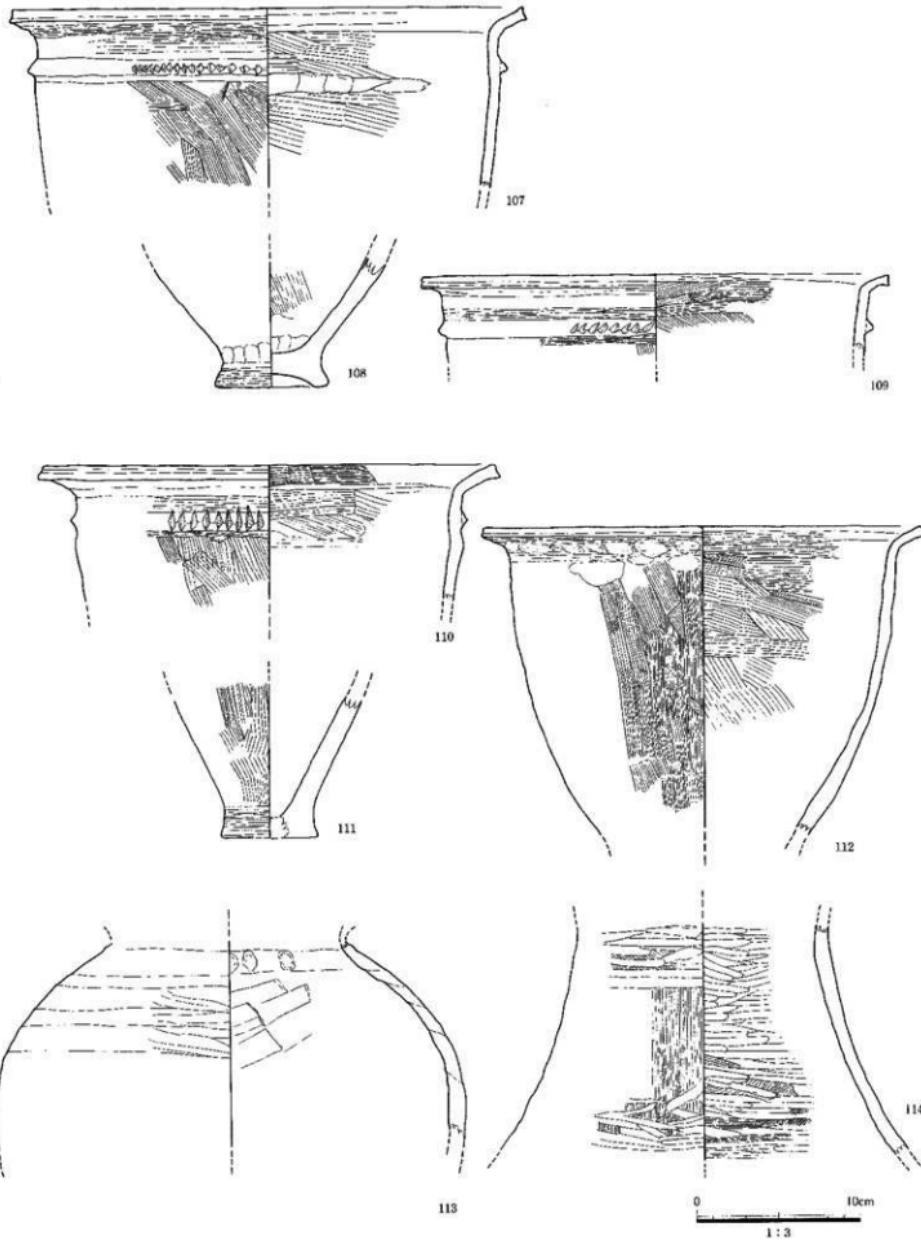


Fig.36 SD1 出土遺物実測図 2 (S=1/3)

## 出土遺物 (Fig.35・36)

・土器 107・109・110・112は壺破片である。107は復元径31.3cmで口縁部下端から3cm程下に幅1.1cmの刻目突帯を付す。108は上げ底の壺底部である。109は復元径28.5cmで、口縁下端から2.6cm下に幅1.1cmの刻目突帯を付す。110は復元径27.6cmで口縁部下端から2.5cm下に幅1.1cmの刻目突帯を付す。111は平底の壺底部である。112は刻目突帯のない壺で復元径26.8cmである。113は壺の肩部から胴部にかけての破片である。器面をミガキで調整する。114は器種が不明確であるが、器面を縦ハケの後ヨコミガキで調整する。天地逆の場合も考えられる。壺の颈部～胴部か。

### ・石器

**緑色頁岩** 当遺跡内で出土した最も大きな石核である。12.5×8.8cm、厚さ1.3～2.0cmを測る。

## 12. 一括出土遺物 (Fig.37)

### ・石器

**緑色頁岩** 115は磨製石鎌の完製品である。先端を欠損するが、刃部は研ぎだしてある。大型の二等辺三角形状を呈し、凹基である。116は磨製石鎌の未製品である。二等辺三角形状を呈し、3.7×2.0cm、平基で両平面を研磨しているが側面の刃部は研ぎだしていない。もっとも明瞭な未製品である。

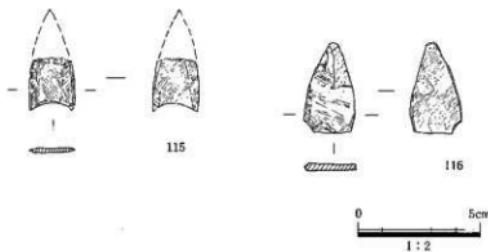


Fig.37 検出面一括出土遺物 (S=1/2)

Tab. 1 西都原遺跡出土土器觀察表1

剖面 層位 No	断面	残存部位	法番	種類		色調	性状	出土 五輪
				外面/内面	外面			
1	北	1 縫隙～断面	1/1/1/1	横ナデ/縫ハケ/横ナデ/横ハケ	10YR2/3によい黄褐色	2.5YR2/2灰黄色	粗粒、褐色系、褐灰色系多い	SAI
2	西	縫隙～断面	1/1/1/1	ヨコナデ/斜めハケ/ヨコナデ/横ナデ	10YR8/3灰黄色	2.5YR3/1灰黄色	粗粒、褐色、褐色系、灰白色、灰白色多い、褐色很少	SAI
3	東	縫隙破片	1/1/1/1	横ナデ/横ハケ	10YR5/4によい黄褐色	7.5YR7/6褐色	有、黄石, 石英, 黄鐵	SAI
4	北	断面	1/1/1/1	縫隙、横ナデ/脚部ヨコナデ/横かへ/横状	2.5YR2/2灰黄色	2.5YR3/1墨黑色	粗粒、褐色系、褐灰色系、灰白色多い、素少	SAI
5	東	断面	1/1/1/1	縫隙、横ハケ、ヨコナデ/縫かい縫ハケ	2.5YR8/2灰黄色	5YR2/1墨色	粗粒、褐色系、褐灰色系が多い、長石、青石がむかう	SAI
6	東	断面	1/1/1/1	斜めハケ/工具ナデ/横ハケ	10YR8/3によい黄褐色	5YR3/1オリーブ色	粗粒、褐灰色系、褐色系、灰石, 灰石	SAI
7	東	断面	1/1/1/1	縫ミガキ/指痕、縫ナデ	2.5YR3/3によい黄褐色～2.5YR2/1墨色	2.5YR7/3灰黄色	粗粒、以石, 深褐色, 帽石色系が多く現じる。	SAI
8	西	断面	1/1/1/1	縫かい縫ナデ/横ハケ	10YR3/3によい黄褐色	10YR1.7/1墨色	粗粒、石英, 灰石が多い	SAI
9	未定?	切迹部	1/1/1/1	ヨコナデ/横断タキ、ハケ/縫断ナデ	10YR7/3/7/4によい黄褐色	10YR7/2によい黄褐色	粗粒、縫肉突、褐灰色系、黄石が多く現じる	SAI
24	東	断面破片	1/1/1/1	初い横工具ナデ/斜め工具ナデ/横ナデ	2.5YR2/2灰黄色～6/2灰黄色	10YR6/2灰黄色	粗粒、縫肉突、灰白色、灰石が多い	SA2
25	南	断面破片	1/1/1/1	初い工具ナデ/板版	2.5YR2/2灰黄色～6/2灰黄色	10YR6/2灰黄色	粗粒、褐色系、灰石, 灰色が多い	SA2
26	伴?	縫跡	1/1/1/1	縫ナデ/工具横ナデ/横ナデ/斜めハケ	10YR7/3/6/3によい黄褐色	5YR4/1墨色～3/1オーバーブル	粗粒、灰白色, 褐色系、青石が多い	SA2
27	東	断面	1/1/1/1	縫断ナデ/縫断指痕、縫ナデ	2.5YR4/4灰黄色	2.5YR4/1灰黄色	粗粒、灰白色, 灰白色多い	SA2
28	北	断面	1/1/1/1	工具横ナデ/不定ナデ	2.5YR2/2灰黄色～6/2灰黄色	2.5YR6/2灰黄色	粗粒、褐色系、褐灰色系, 灰石, 灰石	SA2
29	伴?	断面	1/1/1/1	縫ミガキ、ナデ/工具横ナデ	10YR5/4によい黄褐色	2.5YR6/2灰黄色	粗粒、灰白色, 青石が多い	SA2
35	東	口縫部	21.8/1/1/1	縫断/縫隙	10YR4/3灰黄色	10YR4/3灰黄色	粗粒、褐色系, 灰白色系, 灰石, 灰石	SA3
36	東	断面破片	1/1/1/1	突起部ナデ、ミガキ、ハケ/横ナデ/横ハケ	10YR5/4によい黄褐色	10YR6/4によい黄褐色	粗粒、灰石, 灰石, 灰色が多い	SA3
37	西	口縫部破片	1/1/1/1	縫隙、口縫部にハハの字の剥け/横ナデ	7.5YR7/6褐色	7.5YR7/3によい褐色	粗粒、灰石, 灰白色系, 灰白色	SA3
38	東	口縫部～断面	18.6/15.8/1/1/1	口縫部断面剥離、横ナデ、縫断部横ナデ/斜めハケ	10YR10/2墨褐色～6/3によい黄褐色	10YR5/4によい黄褐色～6/4によい黄褐色	粗粒、石英, 灰石, 金色玻璃, 褐色系	SA3
39	東	断面	1/1/1/1	縫ミガキ, 不定向ミガキ/横ハケ, 縫ナデ	10YR7/4によい黄褐色	10YR4/4灰黄色	粗粒、褐色系, 褐色系多い, 灰石, 灰石, 白苔石	SA3
40	小型土	口縫部	1/4.4/1/12.4/	ミガキ、一部ハケ/縫断指痕版、斜めハケ	10YR6/3によい黄褐色	7.5YR7/4によい黄褐色	粗粒、褐色系, 褐灰色系, 灰石, 灰石	SA3
41	東	断面	1/1/3.6/1/1	横ハケ、横ナデ/縫断版化灰、横ナデ/横ナデ/斜めハケ	2.5YR5/1灰黄色～5/2灰黄色	2.5YR4/1灰黄色	粗粒、褐色系, 灰石, 灰石, 褐色系多い, 青石	SA3
42	東	1 縫隙～断面	31.5/28.4/1/1/1	口縫部断面剥離ナデ、斜めハケ、横ナデ、突起部横ナデ/横ナデ/斜めハケ	10YR7/3によい黄褐色	10YR7/3～7/4によい黄褐色	粗粒、褐色系, 褐灰色系, 灰石	SA3
43	東	口縫部破片	1/1/1/1	口縫部横ナデ、指正底一横ナデ/横ナデ、横ナデ	7.5YR7/6褐色	10YR4/4灰黄色	粗粒、褐色系, 褐色系が多い, 灰石, 青石, 白苔石	SA3
44	東	口縫部～断面	30.0/27.0/1/1/1	口縫部横ナデ、横正底、横ナデ、突起部横ナデ/横ナデ/斜めハケ	7.5YR6/4によい褐色～7/3によい黄褐色	7.5YR6/4によい褐色	粗粒、褐色系, 褐灰色系, 灰石, 青石	SA3
45	東	口縫部破片	1/1/1/1	横ナデ、横ナデ/横ナデ/横ナデ/斜めハケ	10YR5/2灰黄色	10YR5/2灰黄色	粗粒、褐色系, 褐灰色系, 灰石, 青石	SA3
46	東	口縫部～断面	28.6/24.7/1/1/1	口縫部横ナデ、指正底一横ナデ/横ナデ、斜めハケ/横ナデ, 斜めハケ	7.5YR7/3によい黄褐色	10YR5/3灰黄色	粗粒、褐色系, 褐色系, 灰石, 青石	SA3
47	東	断面破片	1/1/1/1	横ナデ、横ナデ/横ナデ/横ナデ	10YR6/2灰黄色	10YR7/3によい黄褐色	有、褐色, 褐色系, 灰石多い	SA3
48	東	口縫部～断面	34.3/31.2/5.6/1/31.8/38.0	1 縫隙剥離ナデ、弯曲下剥離ハケ、縫ハケ、下剥離基底～灰白色、横ナデ/口縫部横ナデ、横ナデ、横ナデ、ナデ/横ナデ、横ナデ/下剥離	10YR4/4によい黄褐色～6/2灰黄色	10YR6/3によい黄褐色	有、褐色, 褐色系, 灰石多い, 灰石	SA3
49	東	断面	1/1/1/1	横ナデ/横ナデ/指痕	2.5YR3/3灰黄色	2.5YR3/1墨黑色	粗粒、褐色系, 褐灰色系, 灰石, 灰石	SA3

Tab. 2 西都原遺跡出土土器觀察表2

Tab. 3 西都原遺跡出土石器・剥片觀察表

## SA1

報告書No.	PL No.	種別	石材	出土位置	最大高(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
10	PL9	鉢石	砂岩	SA1 墓土	21.1	13.5	4.6	2172.9
11	PL9	鉢石	砂岩	SA1 床上	8.6	7.1	4.8	412.8
12	PL9	鉢石	砂岩	SA1 床上	28.5	16.0	14.0	8200.0
13	PL9	鉢石	砂岩	SA1 墓土	11.5	8.0	5.2	397.6
14		削製石器	褐色頁岩	SA1 墓土	3.9	2.0	0.25	2.6 完成品・B基 長/幅 1.96
15		削製石器	褐色頁岩	SA1 墓土	2.4	1.4	0.2	0.9 完成品・平底 長/幅 1.71
16		削製石器	褐色頁岩	SA1 床上	2.6	1.9	0.2	1.7 完成品・田本 長/幅 1.26
17		削製石器	褐色頁岩	SA1 墓土	2.4	1.7	0.25	1.1 完成品
18		削製石器	褐色頁岩	SA1 墓土	2.9	2.0	0.25	2.5 完成品
19		削製石器	褐色頁岩	SA1 床上	2.4	1.7	0.3	1.8 完成品
20		削製石器	褐色頁岩	SA1 床上	2.25	1.65	0.2	1.2 完成品
21		削製石器	褐色頁岩	SA1 床上	2.5	1.9	0.3	1.5 完成品
22		削製石器	褐色頁岩	SA1 床上	1.7	2.1	0.7	2.6 完成品
23		削製石器	褐色頁岩	SA1 床上	1.8	0.9	0.1	0.4 完成品
PL13	55-1	削片	褐色頁岩	SA1 墓土	2.9	2.2	0.6	0.7
PL13	55-2	削片	褐色頁岩	SA1 墓土	2.7	1.4	0.35	1.2
PL13	55-3	削片	褐色頁岩	SA1 墓土	2.4	1.5	0.3	0.9
PL13	55-4	削片	褐色頁岩	SA1 床上	2.55	2.2	0.7	3.6
PL13	55-5	削片	褐色頁岩	SA1 床上	2.0	1.7	0.26	1.1
PL13	55-6	削片	褐色頁岩	SA1 床上	2.35	1.6	0.3	1.3
PL13	55-7	削片	褐色頁岩	SA1 床上	2.8	1.4	0.35	1.8
PL13	55-8	削片	褐色頁岩	SA1 床上	2.25	1.0	0.3	3.6
PL13	55-9	削片	褐色頁岩	SA1 床上	2.1	2.05	0.35	1.4
PL13	55-10	削片	褐色頁岩	SA1 床上	2.6	1.7	0.3	1.0
PL13	55-11	削片	褐色頁岩	SA1 床上	1.8	1.6	0.3	0.9
PL13	55-12	削片	褐色頁岩	SA1 床上	2.0	1.15	0.25	0.6
PL13	55-13	削片	褐色頁岩	SA1 床上	1.7	1.0	0.2	0.4
PL13	55-14	削片	褐色頁岩	SA1 床上	1.9	1.4	0.2	0.5
PL13	55-15	削片	褐色頁岩	SA1 床上	2.3	1.4	1.25	0.7
PL13	55-16	削片	褐色頁岩	SA1 床上	1.6	1.3	0.3	0.6
PL13	55-17	削片	褐色頁岩	SA1 床上	1.55	1.2	0.2	0.4
PL13	55-18	削片	褐色頁岩	SA1 床上	2.2	0.9	0.2	0.3
計出土品重量								9.1 38点
砂岩								11363.5g
綠色瓦岩								45.9 g

## SA2

報告書No.	PL No.	種別	石材	出土位置	最大高(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
30	PL9-45	石錐	頁岩	SA2 墓土	5.7	5.0	1.45	51.4
31	PL9-45	石錐	頁岩	SA2 墓土	-	-	0.75	31.3
32	PL9-45	石錐	頁岩	SA2 床上	7.6	7.4	1.8	157.7
33	PL9-45	石錐	尾崎山形性岩類	SA2 墓土	13.9	7.0	5.6	745.5
34	PL9-45	鉢石	保の山形性岩類	SA2 墓土	9.2	8.8	5.4	538.4
PL9-45		砂岩	SA2 墓土	2.6	2.5	-	36.2 SA2 床上削片 1-1	
PL9-45		砂岩	SA2 墓土	3.5	3.2	-	75.3 SA2 墓土削片 1-2	
PL9-45		削片	瓦岩	SA2 床上	5.7	8.4	1.8	70.8 SA2 床上削片 2-1
PL9-45		削片	瓦岩	SA2 床上	4.4	7.1	1.1	29.6 SA2 床上削片 2-2
PL9-45		削片	瓦岩	SA2 墓土	2.2	4.1	0.6	4.7 SA2 墓土削片 2-3
PL9-45		削片	瓦岩	SA2 墓土	6.3	8.5	1.0	39.8 SA2 床上削片 3-1
PL9-45		削片	瓦岩	SA2 墓土	6.4	6.6	1.0	30.2 SA2 墓土削片 3-2
PL9-45		削片	瓦岩	SA2 墓土	6.1	5.4	0.8	23.5 SA2 床上削片 3-3
PL9-45		削片	瓦岩	SA2 墓土	4.6	5.7	1.1	25.3 SA2 床上削片 3-4

非出土品(未調査資料も含む)

砂岩 1265.2g

頁岩 1001.6g

及均(陶性岩類) 1283.9g

## SA3

報告書No.	PL No.	種別	石材	出土位置	最大高(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
55	PL10	鉢石	砂岩	SA3 墓土	38.0	26.6	13.2	10200.0
56	PL10	鉢石	砂岩	SA3 床上	27.1	28.1	11.0	10900.0
57	PL10	鉢石	砂岩	SA3 墓土	10.4	5.1	3.4	283.2
58	PL10	鉢石	頁岩	SA3 墓土	9.7	2.8	1.4	69.4
59	PL10	鉢石	砂岩	SA3 墓土	13.2	7.7	3.3	651.6
60	PL10	削片	頁岩	SA3 墓土	7.7	6.2	3.85	272.2
61	PL10	削片	尾崎山形性岩類	SA3 墓土	5.4	5.4	2.2	89.5
62	PL10	鉢石	瓦岩	SA3 墓土	8.6	4.5	1.5	93.7
63	PL10	削片	頁岩	SA3 墓土	10.8	4.3	2.0	182.0
64	PL10	削片	砂岩	SA3 墓土	15.2	9.1	6.1	159.2
65	PL10	鉢石	砂岩	SA3 墓土	15.9	11.9	6.8	2400.0
66	PL10	鉢石	砂岩	SA3 墓土	16.7	-	4.8	1096.5
67	削片 PL4-1	尾崎山形性岩類	褐色頁岩	SA3 墓土	3.95	1.6	0.2	2.3 完成品・B基 長/幅 2.47
68	削片 PL4-1	尾崎山形性岩類	頁岩	SA3 墓土	3.6	1.85	0.3	2.9 完成品・B基 長/幅 1.94
69	削片 PL4-1	尾崎山形性岩類	頁岩	SA3 墓土	4.5	1.8	0.2	2.2 完成品・B基 長/幅 2.5
70	鉢石 PL4-1	尾崎山形性岩類	褐色頁岩	SA3 墓土	2.8	1.3	0.25	1.0 完成品・B基灰植

Tab. 4 西都原遺跡出土石器・剥片観察表2

## SA3

発見番号	PL No.	種 別	石 材	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
71	PL14-1	磨削石器	緑色頁岩	SAS 墓土	2.1	1.36	0.35	0.7	光面品・凹凸有り
72	PL14-2	磨削石器	緑色頁岩	SAS 墓土	3.65	0.9	0.2	0.8	光面品・凹凸有り
73	PL14-2	磨削石器	緑色頁岩	SAS 墓土	2.3	1.4	0.25	1.0	光面品・凹凸有り
74	PL14-2	磨削石器	緑色頁岩	SAS 墓土	2.1	2.2	0.4	1.5	光面品
75	PL14-2	磨削石器	緑色頁岩	SAS 墓土	2.6	0.95	0.65	0.8	光面品
76	PL14-2	磨削石器	緑色頁岩	SAS 墓土	2.0	1.08	0.25	1.1	光面品
77	PL14-2	磨削石器	緑色頁岩	SAS 墓土	3.6	1.7	0.2	2.6	光面品
78	PL14-56-1	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	3.9	2.78	0.4	5.1	凹凸有り
79	PL14-56-2	剥片	頁岩	SAS 墓土	3.5	2.2	0.35	2.8	丸形
80	PL14-56-3	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	4.85	2.4	0.35	4.8	丸形
81	PL14-56-4	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	4.3	2.0	0.4	5.4	丸形
82	PL14-56-5	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	4.4	1.9	0.3	2.5	丸形
83	PL14-56-6	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	5.5	3.2	0.4	7.0	丸形
PL14-57-1	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	3.4	4.7	0.6	9.5	三角形	
PL14-57-2	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	3.4	2.4	0.35	2.3	丸形	
PL14-57-3	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	2.7	1.5	0.5	2.7	丸形	
PL14-57-4	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	3.25	1.6	0.5	2.2	丸形	
PL14-57-5	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	2.1	2.7	0.65	4.3	丸形	
PL14-57-6	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	2.5	1.8	0.2	0.9	三角形	
PL14-57-7	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	2.5	1.8	0.2	0.8	三角形	
PL14-57-8	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	1.8	1.1	0.3	0.6	丸形	
PL14-57-9	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	2.9	1.2	0.25	0.6	丸形	
PL14-57-10	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	2.05	2.0	0.2	0.7	丸形	
剥片	緑色頁岩	SAS	2.1	1.7	0.6	2.0	B区-1		
剥片	緑色頁岩	SAS	1.8	1.6	0.6	1.1	B区-1		
剥片	緑色頁岩	SAS	1.8	1.4	0.2	0.4	土55		
剥片	緑色頁岩	SAS	1.8	0.9	0.3	0.3	土54		
剥片	緑色頁岩	SAS	1.6	0.9	0.4	0.5	土55		
タッピ	緑色頁岩	SAS 残・底				0.4	土22, 23, 4		
剥片	フルンフェルス	SAS 墓土	3.8	7.8	2.05	125.3			
剥片	頁岩	SAS	2.9	4.6	1.4	22.1			
剥片	頁岩	SAS 墓土	5.7	3.9	0.6	12.8			
剥片	砂岩	SAS 墓土	4.7	8.7	1.2	42.2			

泥付土質袋(本標識資料を含む)

砂分 30630.6g

緑色頁岩 66g

頁岩 626.5g

瑪瑙(1)酸性岩類 89.5g

フォルンフェルス 148.1g

## SA4

発見番号	PL No.	種 別	石 材	出土位置	断面寸法	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
86	PL11-47	磨削石器?	灰岩	SAM 底上	13.1	7.1	1.9	218.5	

頁岩 218.5g

## SA5

発見番号	PL No.	種 別	石 材	出土位置	断面寸法	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
90	PL14-58	剥片	緑色頁岩	SAS 墓土	5.2	3.8	0.6	15.3	

緑色頁岩 15.3g

## SA6

発見番号	PL No.	種 別	石 材	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
94	PL14-58	剥片	頁岩	SAS	2.4	5.7	0.9	14.4	
95	PL14-58	磨削石器?	緑色頁岩	SAS	3.5	1.75	0.25	1.8	光面品・凹凸有り

頁岩 14.4g

緑色頁岩 1.8g

## SC2

発見番号	PL No.	種 別	石 材	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
100		小砾	砂岩	SC2	6.4	8.7	3.5	790.8	

砂岩 790.8g

## SD1

発見番号	PL No.	種 別	石 材	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
106	PL14-60	石核	緑色頁岩	SD1 墓土	12.5	8.8	2.0	254.1	

緑色頁岩 254.1g

## 検出面一括

発見番号	PL No.	種 別	石 材	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
115	PL14-58	剥削石器	緑色頁岩		2.0	1.9	0.2	1.8	光面品・凹凸有り・四辺
116	PL14-59	磨削石器	緑色頁岩		3.7	2.0	0.3	3.6	光面品

緑色頁岩 7.2g

頁岩 149.8g

## 第IV章 総括

### 1. 周辺地形からみた調査区 (Fig2)

本調査区は西都原台地の東北部にあたり、西側にかけて地形が低くなる。検出面における比高差は約1.2mを測る。調査区の北側に台地が伸び西都原109号墳が所在するが、そこが台地端部で地形が急に落ち谷が開析されている。調査区西側にかけてはさらに地形が落ち、現在は段々畠状に土地が区画されているが、注目すべき点は、平成6年度に県営農村基盤総合整備パイロット事業に伴い行われた発掘調査（註7）で、その底面において幅約15mの大溝が検出されたことである。報告によると検出面からの最深部は1.5mを測り、溝埋土には砂質の層や粘土との互層が細かく堆積しており、流路であったと考えられる。埋土中から弥生中期末～後期前半の土器が出土しており、今回の調査区で検出した遺物と併行する。

さらに視野を広げて地形を観察すると、大溝検出時の報告書で指摘されているとおり（註8）、県立西都原考古博物館の南側から開析された谷地形が男狹穗塚の北で約90°北に向きを変え、さらに第三古墳群の所在する台地にあたり東に向きを変え、本調査区の西側で再度北側に向きを変え、109号墳北側にかけて開析された谷に繋がっているのが分かる。このことから、本調査区は西都原台地に所在する高取山の麓から生じる湧水に源を発すると考えられる流路の東岸を登った所に位置し、水場に近い生活に利のある地形であったと推測できる。

次に視野を狭めて調査区内の遺構配置を観察すると、まずSA1の張り出し部に注目できる。これを入り口と考えると、SA1は西側の流路に向かって入り口を設けることとなる。次にSA3にも小型の張り出し部状の掘方が西壁側にあり、それを入り口施設と捉えるとSA1と同じく西側の谷、流路に向かう。SB1も西側間口の柱穴が一本少ない。掘方の径も小さく、高床状の建物ではなく平地式の施設の可能性が高い。SA4は西壁側に2本の主柱軸に直行する軸で浅い柱穴の掘方が2基検出されている。入り口を構成する柱を立てた可能性がある。他の住居跡には西側へ向けて入り口を設けた痕跡は見当たらないが、後述する住居の主軸が平行する点から、他の住居と同じく西側の流路に入り口を向けた堅穴住居群と推測することができる。

ただ、問題があるとすれば、SA1、SA4とも主柱の軸（棟の向き）と入り口が平行してしまうことである。また、日光の取り入れを考慮すれば、南向きに入り口を設置するのがよいしSA1の張り出し部が入り口と限定できるものではない。

本報告では遺構の観察から、西向きの可能性が高いと推察する。地形の低くなる西側に入り口を向けることで、雨水の住居内への浸入を防ぐ意味と、水場との関係といった地理的要因で理解したい。

### 2. 弥生土器について

本調査区で最も多く出土したのが弥生土器である。完形のものはほとんどないが、在地系の甕、壺、在地産の外来系土器、搬入されたと推測できる外来系土器がある。ここでは、最も多く出土した在地系の甕に関しては各遺構出土遺物を一括して、口縁部と底部で分類する。壺は出土数が少なく外来系のものが多いため、細かい属性による分類は行わず、その特徴を記す。

(1) . 壺

1. 口縁 I 類 逆 L 字状かわずかにもち上がるよう屈曲する口縁をもち、刻目突帯を付す。

A : 口唇部下端がややつまみ出される。頸部にかけて直立する胴部に刻目突帯を付す。

(42, 44, 46)

B : A 類よりも頸部と刻目突帯を付す部分の間隔が狭い。(97)

C : B 類よりも屈曲した口縁部の長さが短い。(109)

2. 口縁 II 類 くの字状に屈曲した口縁の下に刻目突帯をもつ。

A : 口唇部上端がややつまみ上げられ、頸部から胴部が膨らみその部分に刻目突帯を付す。

(48, 84)

B : A 類よりも頸部と刻目突帯を付す部分の間隔が広いもの。(88, 89)

C : 口縁部が肥厚するもの。(35)

3. 口縁 III 類 直立する胴部が頸部から緩やかに外に屈曲するもの。

A : 口唇部端がややつまみ出され、直立する胴部に刻目突帯を付すもの。(1)

B : 口唇部端が平坦で、頸部と刻目突帯を付す間隔が狭いもの。(101)

4. 口縁 IV 類 逆 L 字状かくの字状に屈曲する口縁をもち、突帯を付さないもの。

A : くの字に屈曲し、口唇部端が平坦で口縁端に向けて厚みがなくなるもの。(87)

B : くの字に屈曲し、口唇部端がややつまみ出されるもの。(112)

今回逆 L 字に屈曲するものは破片資料ではっきりしなかったが、43, 45 の資料に可能性がある。

5. 口縁 V 類 大甕の口縁である。

A : 口縁が逆 L 字状に屈曲し、口唇部が肥厚して頸部下に断面三角形の突帯を付すもの。(105)

B : 口縁が胴部上端からくの字に屈曲し、頸部に断面三角形の突帯を付すもの。(104)

6. 底部 I 類 底部が外反しないもの。

A : 底面が平底。(48, 102, 105) B : 底面がわずかに上げ底。(53)

7. 底部 II 類 底部が外反するもの。

A : 底面が平底。(6, 54, 111) B : 底面がわずかに上げ底。(50, 93)

C : 底面が著しく上げ底。(49, 87, 108)

8. 底部 III 類 底部が脚台状を呈すもの。

A : 底面が上げ底。(4, 5)

(2) 在地産外来系土器

搬入品ではなく、在地の胎土により製作された外来系土器の特徴をもつ土器群である。特に壺に多く見られた。ここで認識している在地産の胎土とは肉眼観察によるもので、基本的に在地産の壺や甕に用いられ、にぶい黄橙色・黄灰色・浅黄色などの精良な密度のない粘土を基礎に褐色粒・褐灰色粒・橙色粒・長石が多く混入し、石英、雲母がわずかに混じる粗い胎土（観察表には粗粒と表記）が多い。

38 は口唇部に擬凹線文を施す甕で、器形も第IV様式の伊予系の甕に類似する（註9）。胎土は粗粒でないため、搬入品の可能性もある。85 は SA4 出土の壺胴部破片で、算盤玉状の胴部をもつ細頸甕であろう。この細頸甕は弥生後期前葉に廣く瀬戸内海一帯で姿を現すものであることが

指摘されている（註 10）。SC1、SC2 から出土した 99 と 100 は整形、調整に在地系の壺とは異質な点が認められる。口縁端部の仕上げであるが、つまみ上げることで肥厚させている。凹線や波状文などの施文はされないが、注目すべき点である。

98 は東九州系の壺で、口縁部と底部が欠損しているため情報に欠けるが、頸部・胴部に多条突帯、浮文を施し、胴部は卵形を呈す。黒褐色の緻密な異質な胎土で作られることから搬入品の可能性もある。

### （3）土器の時期について

土器の特徴は、石川悦雄氏の編年（註 11）に対応させると、IV a 期～IV b 期に位置づけられる。今回の出土遺物の中には鋤先状を呈す口縁ではなく、正確には IV b 期が主体であるが、前述した平成 6 年度の調査で本調査区の西側で検出した大溝の埋土から鋤先状口縁の破片が出土しており、周辺で調査された竪穴住居跡からも同じく IV a 期の遺物が出土したことから、遺跡としては IV a 期からおさえるべきだろう。石川悦雄氏が新田原遺跡の報告（註 12）において指摘するとおり、IV a 期は過渡期の土器群で「中期から後期への移行過程を示しており、一方では古い中期的要素を引きずりながらも、他方で新しい要素を合わせ持つこの時代の特徴」を示すものであろう。具体的には「壺のくの字状口縁化あるいはその移行過程、底部平底から上げ底への移行過程、壺口縁部の肥厚化、鋤先の消滅過程、突帯の三角形化、多条化」である。

本調査区では分類した壺口縁 I 類と II 類の共伴や、VA 類と VB 類の共伴、壺口縁の肥厚化、底部の平底と上げ底の共伴などが認められることから、移行後の様相が強いため弥生時代中期末～後期前半をあてる。

曆年代は紀元前 1 世紀末～1 世紀としたい（註 13）。

## 3. 遺構の時期

本調査で検出した主な遺構は竪穴住居跡とそれに伴う土坑群である。出土遺物や遺構の形態から、その時期を検討する。

まず、住居形態、出土遺物とも他の住居跡とは異なるのが SA2 である。平面形は不整な 5 角形状を呈し、埋土、掘方、床構造（貼床無し）、柱穴配置が全て異なる。出土遺物は土器に関しては 25 には内面に貝殻条痕が見られ、また、29 のような上げ底のミガキ調整で仕上げられた底部破片などから縄文晩期の土器群であると判断した。このことから SA2 のみ縄文晩期に遡る。

本調査区を主に構成するのは SA1・SA3・SA4・SA5・SA6・SC1・SC2・SC3・SD1・SB1 である。

SA1 遺構は唯一明確な方形の張り出し部と間仕切りの突出壁をもつ点が他の住居跡と異なるが、出土遺物は弥生土器、磨製石鑿等他の住居跡と大きな差はない。

SA3 は隅丸方形の最も大きな床面積を持ち、南側に不明確であるが小さな張り出し部状の掘方がある。周辺に土坑 3 基と掘立柱建物 1 棟が付随する。出土遺物も最も多く、付隨する SC2、SC3 出土遺物が SA3 出土土器破片と接合することから、同時期に廃棄されたものと考えられる。壺の口縁に注目すると、口縁 I A 類（42、44、46、105）から口縁 II A 類（48、104）があり、古相と新相が見られるが前述したとおり過渡期にあたる資料であろう。弥生時代中期末～後期前半にあたる。ただ、床上に張りついで出土したいわゆる中溝式系の壺（48）は口縁 II A 類であることから住居廃絶時は後期前半に置く。

SA4は隅丸方形の堅穴住居で、出土遺物からみると口縁II A類の中溝式系の甌(84)や在地産瀬戸内系土器で、算盤玉形の形態を呈す細頸甌(85)が出土し、弥生後期前半にあたる。

SA5は隅丸方形の堅穴住居で、出土遺物からも他の住居と大きく時期を違えるものではない。埋土の状況も他と同じである。

SA6は平面形も最も小型で、主柱も1本の構造であるが、床構造、埋土の質などは共通しており少ない出土遺物も甌の底部や磨製石鎌など、他の住居と平行している。

遺構配置図(Fig3)から観察すると、SA3・SA5・SB1・SC2・SC3の主軸が平行する。次にSA4・SA6の主軸が平行し、住居西壁が面を揃える。SA1とはSD1が主軸をほぼ同じくする。これらのことから、出土遺物からはほぼ弥生後期前半の中で捉えてよい住居群であるが、さらに細かく分けると遺構は3つの組に分けることができ、出土遺物の接合関係と主軸の向きからSA3・SA5・SC1・SC2・SC3・SB1を同時期とし、出土遺物からSA1・SD1も同時期、SA4・SA6を最も新しく比定する。

ただ、過去に周辺で調査された際に堅穴住居跡や大溝から出土した遺物はIV a期に遡るために、遺跡としての時期はIV a期～IV b期と捉え、弥生時代中期後半～後期前半にあたると考える。

#### 4. 磨製石鎌について

大陸系磨製石器として分類され、他に磨製石斧・磨製石包丁・石剣があり縄文時代以来の打製石器に加わることで弥生時代の石器を組成する。その中で磨製石鎌は弥生時代中期～後期前半に盛行し、宮崎県下において普遍的に見られる(註14)。

本調査区で最も特徴的な出土遺物である。完製品12点、未製品12点、剥片10点、小剥片・チップは多数出土した。使用された石材は緑色頁岩(註15)と黒色頁岩である。ほとんどが緑色頁岩製で、黒色頁岩の完製品は2点のみで石鎌製作に用いられたと考えられる剥片は3点確認された。

SA1、SA3、SA6から出土し、特にSA1では住居中央に一段深く掘り込まれた部分の床面に緑色頁岩のチップが多数散乱した状態で検出できた。そこには柱穴とは考え難い掘方が検出され、据付型の構築物・作業台のようなものがあった可能性がある。SA1、SA3では台石(12、66)、敲石(11、57)、砥石(10、55、56、58、59、60、62、63、65)がセットで出土した。もちろん磨製石鎌のみの石器製作に限定できるものではないが、未製品の出土とともに住居内における磨製石鎌の製作痕跡を良好に示す資料である。特に砥石の多さと形態の多様さが指摘できる。10、55、56、65のような大型の砥石と58、59、60、62、63のような携帯できる程小型のものもある。後述する製作工程に関わるものと思われ注目できる。砥石の石材では大型品は砂岩で、小型品は頁岩が多い。

出土した磨製石鎌は二等辺三角形状を呈し、長/幅の比率で分類すると、5類に分けられる。

I類 長/幅が約1.3で将棋駒型を呈す。(16) II類 長/幅が約1.5のもの。(15・71)

III類 長/幅が約2.0のもの。(14・68・95) IV類 長/幅が約2.5のもの。(67・69)

V類 長/幅が約4.0のもの。(72)

II類は、小型で重量も軽く研ぎ直しによる摩減した製品の可能性がある。V類は1点のみの出土で、著しく形態が異なるためなんらかのモデルがあると考えられ、他のものとは異なる鉄鎌や骨鎌

などが背景にある可能性があるか他地域に系譜があるものか。磨製石器は全て無茎で、平基と凹基があるが、ほとんどが凹基である。

また、本調査区で確認された住居群が、磨製石器製作を専門的に行った工房的な性格をもっていたものとは考えていない。後述するが緑色頁岩の石核が西都原台地上の丸山遺跡内で検出された弥生後期前半の堅穴住居内から出土したことから、磨製石器に関しては各住居内に材料が持ち込まれ、個々の住居や単位集団で製作されたものであると考える。

緑色頁岩という特徴的な石材については、近隣で産出するものではないことから遠隔地から持ち込まれたものと考えられる。分布と原産地を分析することで石材を通して当時の交流を伺う資料となるだろう（註 16）。

## 5. 磨製石器の製作工程（巻頭 PL4 - 4）

本調査区出土の磨製石器完製品と未製品、剥片、石核を観察すると磨製石器の製作工程が復元可能である。

### 第Ⅰ工程 荒割り

石核の採集段階である。SD1 出土の 106 がある。12.5 × 8.8 で厚さ 2.0cm を測る。また天地返しに伴う調査（註 17）で 69 地点（丸山遺跡）の SA1 からも緑色頁岩の石核（PL14 - 60）が出土している。8.0 × 7.0cm、厚さ 3.5cm を測る。緑色頁岩は周辺に産出する石材ではなく、遠隔の散布地で採集され、小削にして磨製石器専用の石材として各住居跡内に持ち込まれたものと推測できる。

### 第Ⅱ工程 剥片製作と調整

2 段階に分かれる。第 1 段階は石核から長方形の剥片を製作し、二等辺三角形状に調整する工程である。剥離面はそのまま、研磨の痕跡はない。石核の節理に沿って薄手の剥片を剥ぎ取り、長方形に整形する。この段階ではまだ研磨は行われず、剥離面をそのままに残した剥片が出土する。第 2 段階はこれをさらに細かく調整し、二等辺三角形状にすると考えられ、敲石の使用は剥片剥ぎ取りまで、細かい調整には錐状の別の道具があったものと考えられる。特に SA1 中央部掘方床面から出土した緑色頁岩のチップは 0.2 ~ 0.5cm の細かいものが多く見られた。剥片にさらに細かな調整が加えられたことを示すものと考える。この工程を経てある程度石器の形になったものを研磨することで省力化を図ったものと推測する。

### 第Ⅲ工程 研磨

2 段階に分かれる。第 1 段階は第Ⅱ工程で製作された剥離面がそのままの剥片の両面を研磨する段階である。この段階では側面の研磨（刃部の研ぎ出し）は行われない。調査区内で未製品として出土しているものが研磨第 1 段階まで止められたものである。砥石は大型品が使用されたものと推測する。

第 2 段階は側面研磨（刃部の研ぎ出し）である。磨製石器完製品の研磨痕を観察すると、両面の研磨痕と側面（刃部）の研磨痕の方向が異なることが見出される。これは両面研磨工程と側面研磨工程が同じ研磨工程のなかで行われたのではなく、角度、砥石を変えて行われた可能性を示すものである。側面研磨の砥石には小型品が用いられたものと考えられる。また、未製品として出土するものの中に、116 のようにほぼ刃部の研ぎ出しを残しただけのものがあることから、刃こぼれ等の

損傷を防ぐため、研磨第1段階で製作を止めて、保存していた可能性も指摘できる。

## 6. 住居の構造（巻頭 PL.3）

本調査では検出面において、竪穴住居は SA2 を除いて、主柱の構造しかはっきりしなかった。そのため、上屋構造に関しては著しく情報に欠ける。このことから、観察の中心に据えたのは、竪穴住居埋土の状況（巻頭 PL.3）、床構造である。住居の入り口と正面の向きについては前述した。

SA1：隅丸方形の平面形に方形の張り出し部を設ける。床面積は約 30.0 m<sup>2</sup>で、2 本の主柱を東西軸に中央部を一段深く掘り込んだ中に配す。内部に間仕切り的な突出壁をもつ。周壁に沿った床面は一段高くなり、ベッド状遺構となる。床は掘方底面の上に約 10cm の貼床を施す。

SA2：不整形な 5 角形を呈し、主柱が中央に 1 本と、他にピットが 7 本確認された。床面積は約 13.4 m<sup>2</sup>で、貼床はなく、埋土に地山塊が混じらず他の住居と異なる。

SA3：隅丸方形の平面形に中央部を 1 段深く方形に掘り込み、その四隅に 4 本の主柱を配置する。床面積は約 32.5 m<sup>2</sup>で周壁に沿った部分はベッド状遺構を形成し、床は掘方底面に約 10cm の貼床を施す。

SA4：隅丸方形の平面形に 2 本の主柱を東西軸に配置する。床面積は約 16.9 m<sup>2</sup>で中央部などに一段低い掘方はない。西壁側に棟に直交する軸で 2 本のピットが確認できる。床は約 10cm の貼床が施される。

SA5：隅丸方形の平面形で、調査区の際に半分だけ検出できた。推定で床面積は約 7.1 m<sup>2</sup>、柱穴等が確認できなかった。地山塊の混じる貼床がなされている。

SA6：隅丸方形の平面形で、1 本の主柱を配す小型の住居である。床面積は約 6.8 m<sup>2</sup>、床は約 15cm の厚さで貼床が施される。

以上、6 軒の竪穴住居構造を概観したが、主柱本数、床面積とも一定でない。共通する点は主柱が中央に寄って配置される点である。これは花弁状間仕切り住居の主柱配置の特徴であり、屋根の高さを抑え低く作る工夫として考えられている。台風等の暴風雨による被害を回避するため、低い屋根の構造が選択されたものと指摘される（註 18）。西都原地区においては一つ瀬川東岸の地域のように花弁状間仕切り住居が発見されていないが、柱穴配置においては同様な設計原理のもと當まれていた可能性がある。

もう一つ注目すべき点は、竪穴住居の埋土である。土層図で確認すると、時期の異なる SA2 を除き、すべての住居埋土にアカホヤ火山灰塊や黒褐色地山塊が多く混入する。これらは、竪穴住居掘削時の排土と考えた。住居が廃絶された後、どうして地山塊が多く入った掘削時に生じた排土が埋土として入るのか。

この事象の解釈として考えているのが、住居掘方周囲に構築されていた周堤の存在である。竪穴住居最大の難点は雨水などによる湿気であると考えられる。その対応策にはあらゆる方策がとられたことと推測できる。前述した住居群の入り口の向きを、地形が傾斜し低くなる方へ向けたとする根拠もここにある。また、貼床構造も同じく湿気対策であろう。一部掘削して住居掘方底面と貼床層の関係を観察したが、掘方底面は水分を吸収しにくい硬質の粘土層である。その上を直に生活面とせず、掘削時に生じた火山灰層を含む排土で貼り、つき固めて床を構築することで、難吸水性の底面との間に湿気を吸収する層を設けたものと考える。

そして、上層構造と並んで最も遺構として残存し、検出することが困難なのが、住居周囲に廻らされていたと考えられる周堤である。遺構検出面は旧地表面よりも低いため、周堤に伴う土留めや垂木柱などの柱穴等も削平されたことを前提として考える。

都出比呂志氏（註19）は竪穴住居の立体構造を考察し、竪穴掘削時の排土を周堤の盛土に利用した場合、その高さを公式を用いて復元し、実際に遺跡で検出された周堤土留めの板壁の長さや絵画（註20）に見られる表現に適合するものと指摘する。

面積の明らかなSA1・SA3・SA4・SA6で考えた場合の住居掘方を掘削する際に生じた排土量を計算する。旧地表面が調査時の検出面であるアカホヤ火山灰層上面より何cm程上であったかを遺構検出時の一括遺物の出土状況から推測すると、約20cm上であったと考えられる。また、貼床が平均10cm程施されていたと考えて住居掘方の深さを復元すると約50～80cmは地表面から掘削していたと考えられる。このことから掘削時の排土量を計算する。SA1とSA4に関してはアカホヤ火山灰層も削平を受けていたことから、検出時に計測できた深さよりさらに深く掘削されていた可能性が高く、掘削深度は現在復元できるものより深くなると予想され、下記の計算で算出した土量よりも増加するだろう。

$$SA1 : 30.0\text{m}^2(\text{面積}) \times 0.56\text{m}(\text{掘削深度}) = 16.8\text{m}^3 \quad SA3 : 32.5\text{m}^2 \times 0.85\text{m} = 27.6\text{m}^3$$

$$SA4 : 16.9\text{m}^2 \times 0.55\text{m} = 9.3\text{m}^3$$

$$SA6 : 6.8\text{m}^2 \times 0.8\text{m} = 5.4\text{m}^3$$

次に周堤に必要とされる土量を計算する。住居周囲に幅1m・上辺70cm・高さ50cmの台形の周堤を全周させた場合で考える。

$$SA1 : \text{約 } 10.3\text{ m}^3 \quad SA3 : \text{約 } 12.7\text{ m}^3 \quad SA4 : \text{約 } 9.2\text{ m}^3 \quad SA6 : \text{約 } 5.8\text{ m}^3$$

上記の結果から、SA6の場合を除いて住居掘削時の排土で周堤を構築できるだけの土量が確保できていたと考えられる。

本調査区の竪穴住居に、周堤が竪穴掘削時の排土を用いて構築されていた可能性は高い。その痕跡が住居埋土に見られる、埋没初段階に堆積したと考えられる地山塊の多く混入する層であると推測する。

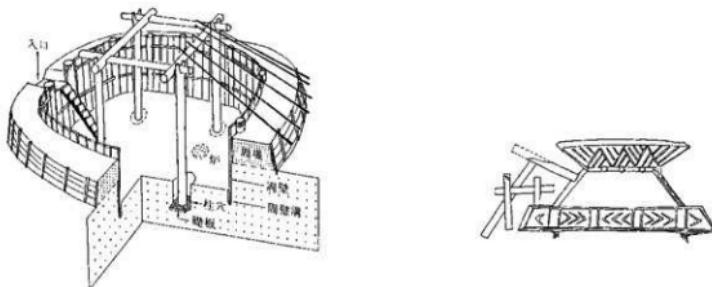


Fig.38 竪穴住居構造模式図・奈良県東大寺山古墳出土環頭太刀装飾  
註19文献から転載 都出（1975）

## 註

1. 西都市教育委員会編 1990 「丸山遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集』
2. 西都市教育委員会編 1976 「原口遺跡」『西都の歴史』
3. 駒井和愛他 1960 「宮崎県兒湯郡西都市寺原及び寺崎の遺跡」『高千穂・阿蘇』
4. 西都市教育委員会編 1985 「寺原第一遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集』
5. 西都市教育委員会編 1992 「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集』
6. 西都市教育委員会編 1996 「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集』
7. 前掲註 6・P74 ~ 77
8. 前掲註 6・P139
9. 柴田昌児 2000 「伊予東部地域」の図から推測した。菅原康夫・梅木健一編 『弥生土器の様式と編年 四国編』 木耳社
10. 大久保徹也 「中国・四国地方の土器」『考古資料大觀 第2卷 弥生・古墳時代 土器II』 小学館
11. 石川悦雄 1983 「宮崎平野における弥生土器編年試案 (MKII)」『宮崎考古 第9号』
12. 石川悦雄編 1986 「新出原遺跡 第5章 考察」宮崎県新富町文化財調査報告書第4集
13. 本報告で使用する曆年代観は武末純一 2003 「弥生時代の年代」『考古学と曆年代』 西川寿勝・河野一隆編に示された曆年代観を参照してあてた。
14. 長津京重 1996 「17. 宮崎の石器」『農耕開始期の石器組成 2 九州』 国立歴史民俗博物館資料調査報告書7
15. 緑色真岩という呼称は今回の調査で出土したオリーブ灰色を呈す磨製石器石材を墨色を呈す真岩と区別するため便宜的に使用したもので、正式な名称ではない。註6の報告では緑泥片岩と表記されている。
16. 下条信行氏 (1976) は弥生中期から後期に山岳地帯で磨製石器が盛行することに注目し、その存在は山岳系住民の特徴として各種の狩猟活動を展開していたことを推測し、それによる山地型住民相互の交流の活発さと行動力が九州の西と東の文化をつなぐ媒体の役割を果たしたことを探測する。その根拠に同一石材の磨製石器が広範な分布を呈すことが確かめられつつあることを挙げている。
17. 豊方政幾編 2006 「西都原地区遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第44集』に調査地点の報告がある。
18. 北郷泰道 1997 「第3章第5節 花弁状間仕切り住居の成立と弥生文化後期の特色」『宮崎県史 通史編原始・古代1
19. 部出比呂志 1975 「竪穴住居の周堤と壁体」『考古学研究』22卷2号
20. 奈良県東大寺山古墳出土環頭太刀柄頭の家型装飾は扉板の裾に低い台形の壇の表現が認められ、周堤と考えられる。

## 参考文献

- 赤塚次郎編 2003 『考古資料大觀2 弥生・古墳時代 土器II』  
下条信行 1976 「九州における大陸系磨製石器の生成と展開－石器の組合・形式の連関性と文化圏の設定－」  
「史蹟」第114輯  
西川寿勝・河野一隆編 2003 『考古学と曆年代』  
菅原康夫・梅木謙一編 2000 『弥生土器の様式と編年 四国編』



**PLATES**

---



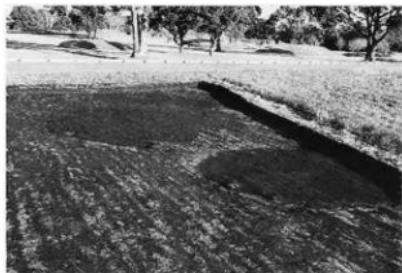
1. 調査区遠景（北から）



2. 調査区全景（真上から）



3. SA1・SA2  
床面検出状況（真上から）



4. SA1・SA2 検出状況



5. SA1 土層断面(A-A')1



7. SA1 遺物出土状況



6. SA1 土層断面(A-A')2



8. SA1 中央部掘方



9. SA1 掘方と貼床の関係



10. SA1 主柱埋土



11. SA2 遺物出土状況



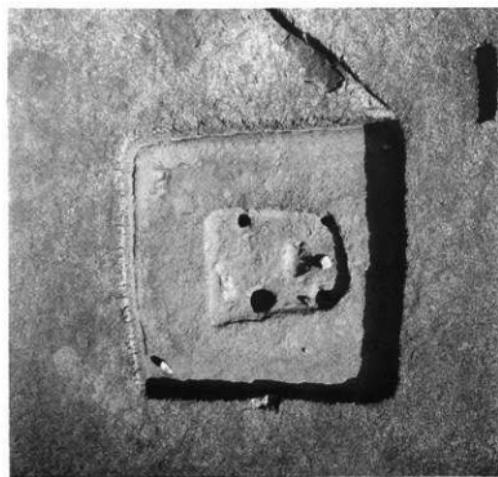
12. SA2 土層断面(A-A')1



13. SA2 土層断面(A-A')2



14. SA3 検出状況



15. SA3 床面検出状況



16. SA3 土層断面(A-A')1



17. SA3 土層断面(A-A')2



18. SA3 土層断面(B-B')1



19. SA3 土層断面(B-B')2



20. SA3 遺物出土状況



21. SA3 床直上カメ出土状況



22. SA3 壁方と貼床の関係



23. SA3 主柱土層断面



24. SA4 床面検出状況



25. SA4 検出状況



26. SA4 土層断面(A-A')1



27. SA4 土層断面(A-A')2



28. SA4 土層断面(B-B')1



30. SA4 遺物出土状況



29. SA4 土層断面(B-B')2



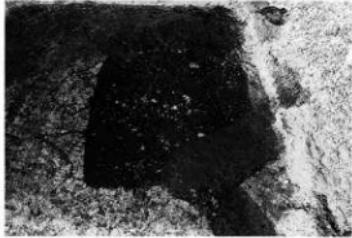
31. SA5 遺物出土状況



32. SA5 土層断面



36. SC2 遺物出土状況 1



33. SA6 検出状況



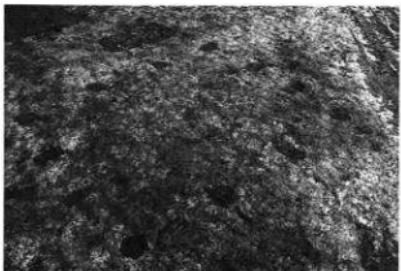
34. SA6 土層断面



35. SA6 床面検出状況



37. SC2 遺物出土状況 2



38. SB1 梢出状況



39. SD1 半截状況



40. SD1 遺物出土状況



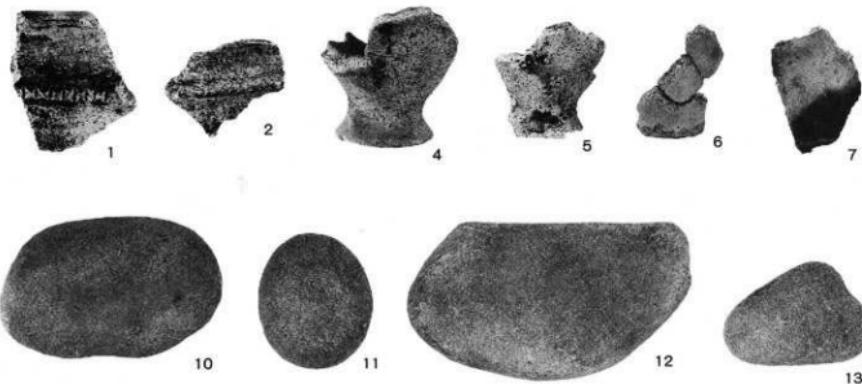
41. SD1 完掘状況



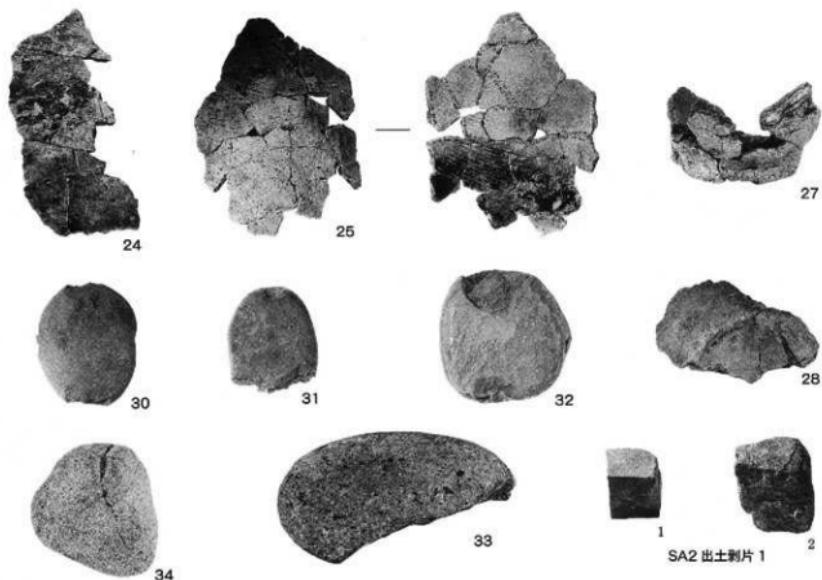
42. 調査区西側



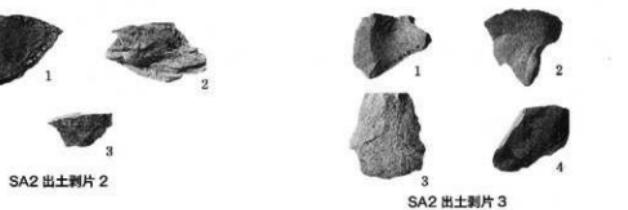
43. 芋貯蔵穴（現代）



44. SA1 出土遗物

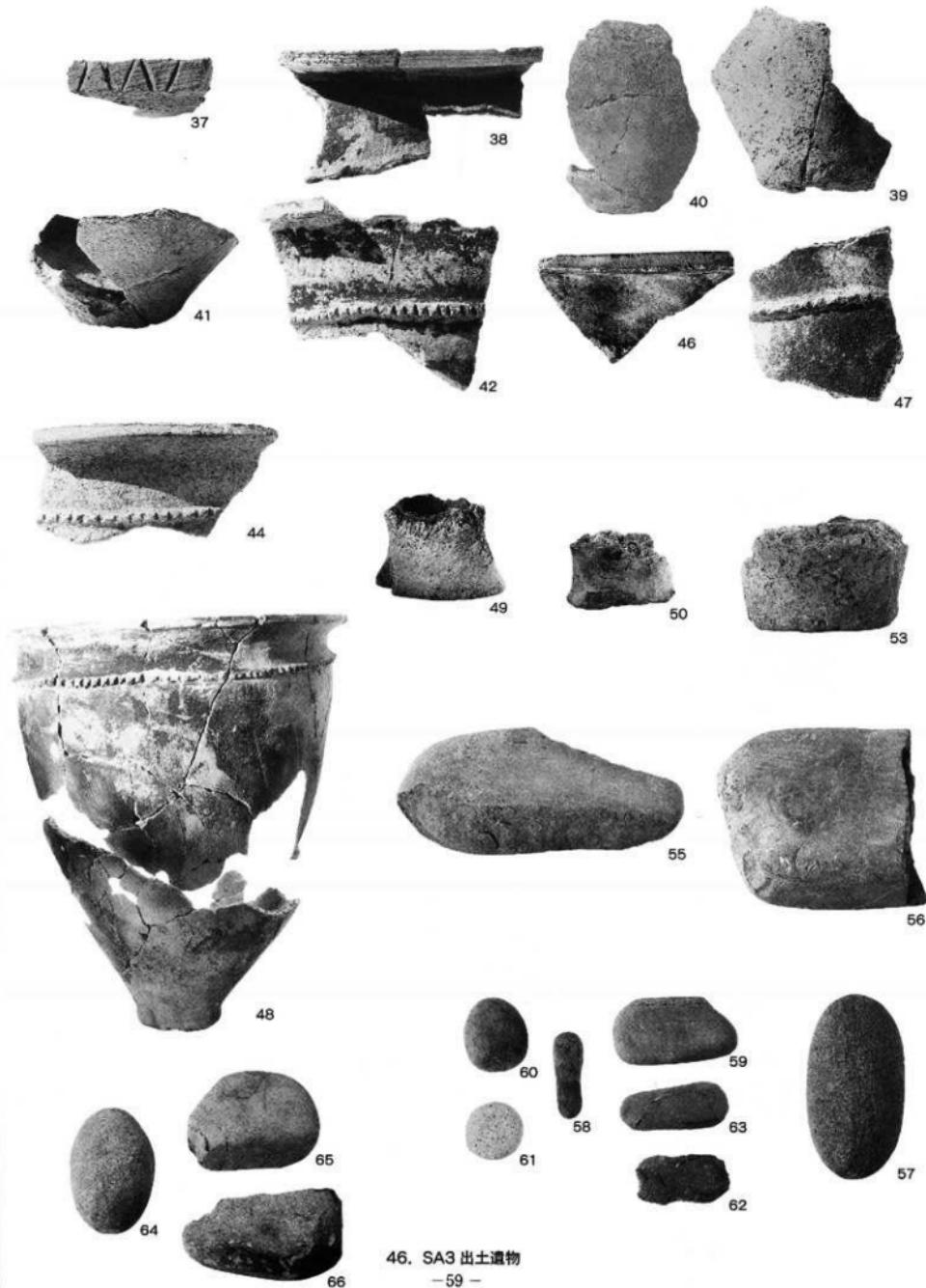


SA2 出土剥片 1



SA2 出土剥片 3

45. SA2 出土遗物

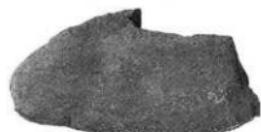




84



85



86

47. SA4 出土遺物



87



88



9

48. SA5 出土遺物



92



93



96



97

49. SA6 出土遺物

50. SC1 出土遺物



98



99



100



102

51. SA2 出土遺物 1



104



105



114



52. SC2 出土遺物 2



107



109



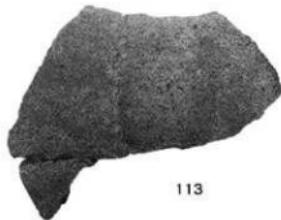
110



108



111

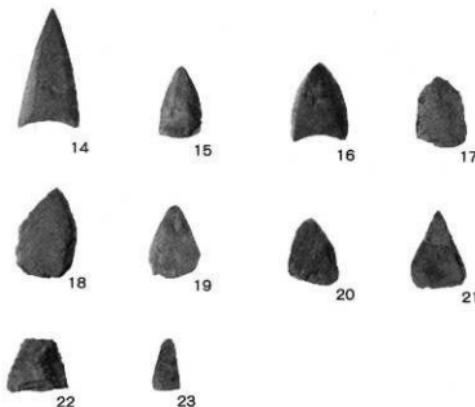


113

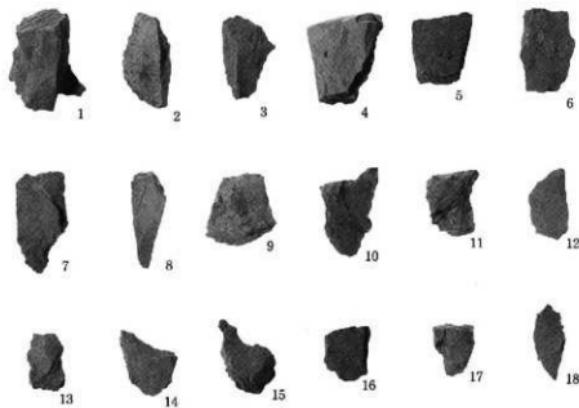


112

53. SD 出土遺物



54. SA1 出土磨製石器完製品・未製品



55. SA1 出土綠色頁岩剝片



56. SA3 出土頁岩剝片

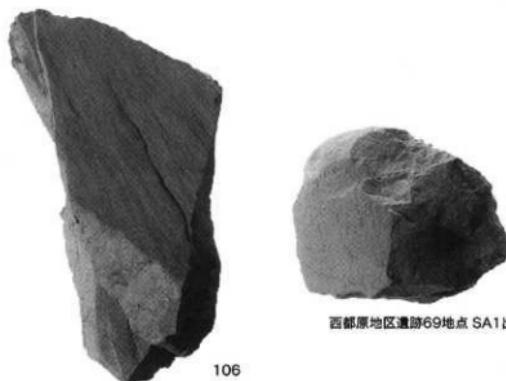
57. SA3 出土綠色頁岩剝片



58. SA5、SA6 出土磨製石礫・剝片



59. 檢出面一括磨製石礫未製品



西部原地区遺跡69地点 SA1出土石核

60. 綠色頁岩石核

# 報告書抄録

ふりがな	さいとばるいせき				
書名	西都原遺跡				
副書名	西都原周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書				
巻次	第1集				
シリーズ名	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書				
シリーズ番号	第45集				
編著者名	津曲大祐				
編集機関	西都市教育委員会				
所在地	〒881-8501 宮崎県西都市聖陵町2丁目1番地 TEL 0983-43-1111				
発行年月日	西暦 2006年3月30日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 遺 跡 番 号	北 緯	東 經	調査期間
さいとばる 西都原遺跡	みやざきけんさいとし 宮崎県西都市 おおあざひがしたての 大字東立野 4705番地	1029	旧測地系 32° 07' 15" 3166 { 32° 07' 15" 7013	旧測地系 131° 23' 27" 9702 { 131° 23' 25" 2924	20041207 {
			世界測地系 32° 07' 27" 7528 { 32° 07' 26" 1377	世界測地系 131° 23' 19" 4501 { 131° 23' 16" 7725	20050216 {
調査原因	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西都原周辺整備事業に伴う駐車場建設工事	集落	弥生時代中期末～後期前半	竪穴住居跡 ・土坑	弥生土器・ 石器・磨製 石器	竪穴住居内における磨製石器製作痕跡
調査面積	試掘調査		本発掘調査		
			2,397m <sup>2</sup>		

---

西都市埋蔵文化財発掘調査 第45集

西都原遺跡

平成18年3月30日発行

編集発行 西都市教育委員会

印刷所 (有)ふくしげ印刷

---

175

100